

学術交流の拠点としての真宗総合研究所	1
2006(平成18)年度「指定研究」研究経過報告	2
2006(平成18)年度「一般研究」研究結果概要	9
海外学会参加報告	17
研究調査出張報告	22
特別研究員研究発表会	24
彙報	24

## 学術交流の拠点としての真宗総合研究所

真宗総合学術センター長 兵藤 一夫  
真宗総合研究所長

大学の国際化が言われて久しいが、大谷大学でも昨今それが実質的なものとして定着してきたように思われる。これまでの個々の研究者の関係の中での個人的で散発的な交流（例えば海外における学会やシンポジウムなどへの参加など）に止まっていたものが、本学と海外の大学や研究機関との組織的で継続的な学術交流へと変化してきたようである。そして、ここ2、3年は、学術交流をさらに確実に継続発展させるために外国の大学や研究機関と学術交流協定を締結することも増えている。

ちなみに、これまでに本学が正式に学術交流協定を結んでいる外国の大学や研究機関は次の通りであるが、さらに今後も幾つかの大学と協定を締結するための話し合いが行われる予定である。

中国：東北師範大学、首都師範大学、浙江財経学院

台湾：佛光大学

韓国：東國大學校、東西大學校

フランス：国立高等研究院

ドイツ：フィリップス・マールブルク大学

ハンガリー：エトヴェシ・ロラーンド大学

その他米印3機関

従来の交流協定は英語や中国語の語学研修などが中心であったが、最近では大学院や学部への留学生の相互受入れ、教員や研究者の相互派遣や共同研究などへと内容が変化してきている。その中で、真宗総合研究所は学術交流の実質的な拠点としての役割を果たしているのである。

真宗総合研究所は設立当初から、海外を含めて、最近の真宗・仏教関係の文献を収集・整理すること、学外の研究者や研究機関との交流や共同研究の拠点となることが求められていた。その場合、中心となるのが、1. 指定研究における継続的な取り組み、2. 客員研究員・特別研究員の受入れ、である。それらについて略記すれば、

### 1. 指定研究における継続的なもの

真宗総合研究所における学術交流の中心となっているのが指定研究「国際仏教研究」である。この研究は現在、英語班、ドイツ・フランス班、中国班の三つに分かれ、それぞれの班で個別に共同研究を進めながら必要に応じて相互に連携・協力している。

06年度（昨年度）は真宗総合研究所の開設25周年にあたり、それを記念して二つの国際的なシンポジウムが開催された。一つは、英語班を中心に企画された「南都仏教の中世的展開」である。もう一つはドイツ・フランス班と学術協定機関であるフランス国立高等研究院との共同企画による「宗教と近代合理精神—日仏文化の比較をとおして—」である。いずれも、本学の研究者に加え国内外の研究者が一堂に会して、研究発表をすると共に、活発な意見交換や議論がなされ、非常に有意義なものとなった。（詳しい報告は『研究所報』No.50に掲載）また、ドイツ・フランス班ではマールブルク大学との学術交流の一環として続いている国際ルードルフ・オットー・シンポジウム（第6回）やフランス国立高等研究院との次回の共同シンポジウムの準備も進められている。また、中国班は東北師範大学との学術交流協定に基づき中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教及び関連文化の諸相について共同研究を続けており、本年9月にはその研究成果の一つとして東北師範大学の程舒偉教授と本学の木場明志教授が編した『日中両国の視点から語る 植民地期満洲の宗教』（柏書房、2007）が出版された。

「西藏文献研究」では、チベット・ラサの社会科学院や西藏大学、北京の蔵学研究センターと研究員が相互に訪問するなどの交流を行っている。また、この研究班では、タイの現地の仏教研究者や僧と協力しながら仏教文献写本の調査研究も行っている。

### 2. 客員研究員・特別研究員の受入れ

真宗総合研究所では、外国からの研究者を客員研究員や特別研究員として積極的に受入れている。それまでに交流のある大学や研究機関からだけではなく、日本において仏教やその周辺の研究をしようとする研究者に研究の場を提供し、今後の交流につながることを期待してのことである。昨年度から今年度にかけては外国からの特別研究員として、イタリアから2名、インドから1名、中国から2名在籍している。

このように、真宗総合研究所を拠点とする形で、本学の学術交流は継続的で実質的なものになってきており、今後いっそうの展開が期待できるであろう。

# 2006(平成18)年度「指定研究」研究経過報告

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念  
特別指定研究

## 親鸞像の再構築

チーフ・教授 安富 信哉  
(真宗学)

本研究は、2011年に迎える親鸞聖人750回御遠忌に向けて、過去50年間にわたる親鸞研究の動向を整理・検証し、これからの親鸞研究に新たな展望を開くことを目的としている。本年度は、「親鸞像の再構築」というテーマの下、「史的な親鸞像の再検討」と「文献目録の作成」という二つの研究課題を軸にして、活動を行った。

### 1. 史的な親鸞像の再検討

昨年度に引き続いて親鸞像の研究を推進していくために、継続的に公開研究会を開催した。本年度は3人の講師を招聘し、のべ4回の公開研究会を行ったが、様々な立場から親鸞像や御遠忌の歴史そのものを問う視点を提示していただいた。以下、研究会の梗概を記したい。

#### ・第3回公開研究会(6月14日 16:00~17:50)

本研究班の嘱託研究員であり大阪大学教授の平雅行氏より「善鸞義絶状と偽作説」と題して発表いただいた。善鸞義絶状は、1960年代から現在に至るまで真偽論争が繰り返されている。それは、義絶状には真筆がなく伝来のされ方に疑義がもたれているためであるが、平氏は中世文書の他の事例を列挙して、義絶状は真撰であると結論づけられた。中世文書の性格に着目し、実証的に論じられた平氏のご発表は、親鸞の歴史思想史的背景を解明し史実上の親鸞に迫るという課題において、大きな示唆を受けるものであった。

#### ・第4回公開研究会(10月12日 14:00~16:00)

大谷大学名誉教授である大桑齊氏より「御遠忌の歴史—自己と時代に向き合う—」と題して発表いただいた。本発表では、御遠忌の歴史について近年の研究をもとに史料を再検討する形で紹介された。御遠忌は250回忌までは、同時代史料がなく執行の確証が得られないが、永承4年(1561)に行われた300回忌は、御遠忌そのものが一般化していなかった当時の日本仏教界において先駆的なものであったという。御遠忌は、内なる教団と自己、

他者としての世間と時代に向き合う機縁であるとし、教団の50年ごとの自己点検と世間への開放という意味があると述べられた。そしてこの営みから求められてくるものとしての親鸞像があるということを描かれた。

#### ・第5回公開研究会(11月15日 16:00~18:00)

大谷大学非常勤講師である福島和人氏より「今、親鸞像の再構築ということ—吉野秀雄、廣小路亨の親鸞思想について—」という題で発表いただいた。本発表では「現代における親鸞思想との出会い」というテーマの下、近代の歌人である吉野秀雄と教育者・廣小路亨の生涯と思想を紹介していただいた。両者ともに親鸞研究の中では、あまり知られていない人物ではあるが、親鸞の思想に生きた人である両者のような人物に注目していくことも、親鸞像の再検討を図っていく上で重要なことであると考えられた。

#### ・第6回公開研究会(12月7日 14:00~16:00)

第4回公開研究会に引き続き、大桑齊氏より「御遠忌の歴史—自己と時代に向き合う—」と題して御遠忌の歴史について報告いただいた。前回は主に中世後期から近世前期の時代をお話しされたが、今回は近世から近代にかけての御遠忌の歴史を取り上げられた。近世については、400回忌から600回忌にかけての御遠忌を機縁として様々な親鸞伝が展開していることを指摘された。また、近代最初の御遠忌である明治44年の650回忌では、それに先行する明治31年の蓮如上人400回忌から連続して、国民国家や戦争と真宗の関わりという問題に直面していたことが指摘された。

各研究会において、今後親鸞研究を推進していく上での重要な視点が提示され、また参加した研究員や研究員以外の先生方からも活発に意見が出された。特に本研究班は「御遠忌記念特別指定研究」として発足し、「親鸞像の再構築」をテーマとしている。このような研究班において、2回にわたる大桑氏の研究会を通じ、「御遠忌」が各時代における「親鸞像」形成の機縁となっていた事を確認出来た点は、大変意義深いことであった。また御遠忌史研究が新たな研究分野であり、さらに「受容された親鸞像」を明らかにする上でも重要な研究である事も確かめられた。

### 2. 文献目録の作成

前回の御遠忌以降の50年間(1961~2011)にわたる親鸞研究の各部門における研究史を回顧し、資料として活用できる文献目録の作成を目指して、現在プロジェクトを推進している。本年度は、文献目録作成方針を正式に

決定し、その方針に順って作業を行った。以下、文献目録作成方針を掲載し、経過報告を記したい。

・目的：親鸞研究の各部門における研究史を回顧し、研究成果を資料として活用できる〈データベース〉〈文献目録〉を作成する。

・収録年代：1961年(昭和36)4月の親鸞聖人700回御遠忌から、2011年4月の750回御遠忌までの50年間。

・収録範囲：①親鸞に関わる著述 ②七高僧に関わる著述(ただし、真宗との関連で論述されたもの) ③親鸞の直弟子に関わる著述 ④親鸞の著述・七高僧の著述(ただし真宗教学と関連するもの)・直弟子の著述・浄土経典(浄土三部経、他)などの基本テキスト。

・分類：Ⅰ日本語文献(和書)、Ⅱ外国語文献(洋書)。Ⅰ日本語文献はさらに、①単行本 ②論文1(学術雑誌所収のもの) ③論文2(記念論文集・アンソロジー所収のもの) ④全集・叢書の4分類とする。

Ⅱ外国語文献はさらに、①単行本 ②論文1(学術雑誌所収のもの) ③論文2(記念論文集・アンソロジー所収のもの)の3分類とする。

・その他：学術的な著作・論文だけではなく、一般的な講義・講話・エッセイ・書評紹介なども網羅的に収録した〈データベース〉の作成を目指す。〈データベース〉はWeb上で逐次公開予定である。2011年の750回御遠忌には、〈データベース〉から、学術的な著作・論文を抽出した〈文献目録〉の出版を目指す。

本年度は、以上の作成方針に則って作業を継続的にを行い、各分類ごとに〈データベース〉のサンプルを作成し、『真宗総合研究所紀要』第24号(2007年3月発行)に掲載した。今後、内外からの批判・助言を得た上で改良を加えていく予定である。

## 大学史研究

### 大学史関係資料の 収集・整理・公開

チーフ・教授 織田 顕祐  
(仏教学)

#### 【清沢満之研究に関する業務】

①『清沢満之全集』未収録文献文字起こし作業について  
昨年度も、従前に引き続き、『清沢満之全集』未収録

文献の翻刻作業を行った。特に昨年度は、欧文文献の翻刻作業に重点を置き、文献20点、フィルム49本の翻刻作業を終えることができた。

#### ②清沢満之『臘扇記』の出版企画への協力

清沢満之記念会の清沢満之『臘扇記』の出版企画への協力として、本研究班が担当する『注釈 臘扇記』(仮称)の出版準備作業を行った。主な作業として、清濁音の補正や句読点の挿入などを行い、またルビや注をつけるための読み合わせを年度内に計38回行った。9月20日には、沙加戸弘、天野勝重両先生をお招きして国語表現の取り扱い等についての検討会を開催し、出版目的に沿った編集方針とその凡例の確認、表記法に関する詳細な検討を行った。また11月9日～10日には、愛知県碧南市の清沢満之記念館をはじめ、清沢満之や『臘扇記』成立と関係の深い寺院(刈谷市敬専寺、安城市本証寺、西尾市唯法寺等)を訪問し、聞き取り調査や、『臘扇記』に記述される人名・地名・書名等の調査・確認を行った。

#### 【佐々木月樵研究に関する業務】

昨年度作成した文献目録を基礎として、大学の教育・研究の公開を積極的に進めた佐々木月樵に関する文献の収集を継続して行っている。

#### 【大学史研究関係資料保存に関する業務】

当研究班の前身である真宗学事史研究・大学史編纂研究において収集された資料の整理と保存に関する業務を継続して行った。現在、①学寮・真宗大学・真宗大谷大学・旧制大谷大学・新制大谷大学の各時期にわたる原史料9,000点余りの保存と、②写真史料の保存の2種の作業を主として行っている。

①は、大学行政史料をはじめとする大学史研究所蔵の貴重な史料群の長期保存に向けた作業である。前年度から引き続いて、従来の応急的な保存の方法を改め、中性紙封筒への入れ替えを行っている。また、この作業と併行して、既成のデータと原史料との照合・再調査を行い、史料情報の充実を図っている。

②は、大学史研究が所蔵している大学の写真史料の保存と公開に向けての作業である。昨年度は、先ず175点に及ぶ大型の写真史料をデジタルカメラで撮影し、閲覧・公開の準備を整えることができた。一方、小型の写真史料に関しては未だに十分な処置が施されておらず、閲覧請求や公開にも迅速に対応できない状態にある。今年度は、これらの早急な整理・データベース化を行うことを課題の一つとしたい。

### 【近世学事・学寮史研究に関する業務】

本研究班の重要な研究課題として、過去の「300年史」に関する研究成果を改めて確認し、これを踏まえて、近世における学事の進展に大きな役割を果たした「学寮」について、その実態と歴史的意義を考究することがある。

これに関して、昨年度は、江戸時代初期から明治時代中期に至る本願寺派・大谷派両派における学寮の制度的変遷、講義・講者・典籍・関連事項の記録等について、年表形式で通覧することができる『真宗学事史年表』を作成した。この方面において蓋然性の高い研究を進める上で、大谷派だけではなく本願寺派の宗学を中心であった「学林」の流れをも把握する必要性が共有されたためである。今後はこの基礎的情報を十全に活用した、近世学寮研究の具体的な進展が課題となる。

また、この『真宗学事史年表』の作成とともに、2005年度以来の課題として設定している、諸国に多くの門弟を輩出した学寮第五代講師香月院深励（1749～1817）にスポットを当てた研究を進めた。その理由については、2005年度の研究経過報告（研究所報No.49所掲）に記した通りである。

昨年度は当該研究の基礎作業として、①深励の著作目録の作成、②深励関係寺院の調査を行った。①については、本学図書館の協力を得て、館蔵の深励関係の史料を閲覧・調査し、その成果として「香月院深励関係資料目録台帳」を作成した。また、②については、深励の自坊である福井県あわら市金津の永臨寺、出生寺院である同福井市菟浦の大行寺、および、深励の門弟であり学事に多大の業績を残した丹山順芸（1785～1847）の自坊である同鯖江市下糸生の浄勝寺を訪問し、文書・典籍や所蔵の現況等についての調査を行った。さらに、こうした基礎作業の成果として、加藤基樹氏（前「大学史研究」研究補助員、現任期制助教）による、「大谷大学図書館蔵『香月院深励関係書籍目録』と香月院深励をめぐる歴史研究課題の覚書」（『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第24号、2007年）を発表し得た。今後は、右の基礎的研究で明らかになった成果ならびに視点・成果を共有しつつ、時代背景や関連する諸状況をも考慮しながら、深励の学問の特質を解明することを当面の課題としたい。

### 【他大学大学史編纂室との交流】

昨年度も全国大学史資料協議会主催の各種の行事に参加した。他大学の大学資料館や博物館などを見学し、他大学の自校史研究・公開の現状と課題について学ぶとともに、活発な意見交換により今後の大学史研究のあり方についての認識の共有・深化につとめた。

## 国際仏教研究

### 諸外国における仏教研究動向の把握と資料の整理・収集・公開

チーフ・教授 宮下 晴輝  
(仏教学)

本研究班は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握すると共に、本学における仏教研究の成果を、国際社会に紹介することを目的としている。この目的を達成するため本研究班では、仏教を中心とした海外宗教関係出版物の収集と整理や、国際学会への研究員の派遣、真宗・仏教関係文献の英語やドイツ語への翻訳作業などを進めている。

本年度はこれらに関して、英語班、ドイツ・フランス語班、中国班の3班に分かれて研究を進めてきた。2006年度のそれぞれの研究経過は以下の通りである。

#### 〈英語班〉

##### 1. シンポジウム「南都仏教の中世的展開」の開催

通常の研究業務（各種学会への研究員の派遣や海外仏教関係資料収集）に加え、本年度は、本学においてシンポジウム「南都仏教の中世的展開」を企画し開催した。2年来の構想を経て、R.F.ローズ元国際仏教研究班チーフを中心として6月頃から具体的検討を重ね、ようやく本年度開催することができたものである。

10月6日(金)～7日(土)の2日間にわたり、響流館3階メディアホールにおいて開かれた同シンポジウムには、国内外から多数の研究者の参加があり、中世の南都仏教の展開について、最新の研究成果をもとに活発な議論が交わされた。また会期中には、プリンストン大学ジャクリー・ストーン教授による公開講演会「死の克服—中世日本の臨終行儀をめぐる—」ももたれ、一般の聴衆を含め、氏の「臨終行儀」をめぐる興味深い発表に対して多数の質問が寄せられた。

尚、本学からは織田顕祐教授(当時助教)が「凝然による華嚴教学の組織化」と題して、三木彰円講師が「中世の聖徳太子像—親鸞の場合」と題して、藤谷昌紀講師(当時非常勤講師)が「観尊『勸発菩提心集流壅記』をめぐる」と題して研究発表がなされ、本学における仏教研究の一端を紹介していただいたことである。

今後はこのシンポジウムの記録を活字化し、公開する

予定である。

## 2. 「国際真宗学会」参加に関して

2007年8月3日(金)～5日(日)に、カナダ・カルガリー大学において国際真宗学会が開催される。これまで研究班では、この学会に継続的に研究員を派遣してきたが、2007年度大会には大谷大学としてパネルの形で参加することとなった。同大会の共通テーマは「非僧非俗一浄土真宗のこころ」(Neither monk nor layperson - The Spirit of Jodoshinshu)である。検討の結果、井上、木越研究員、マイケル・コンウェイ研究補助員に加え、加来雄之、一楽真の両准教授を交えて、パネルを開くこととなった。

大会テーマにそったパネルのタイトルや、それぞれの研究発表内容について、検討を重ねる会を開いた。

## 3. "An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings"の出版に関して

ニューヨーク州立大学(The State University of New York)から出版予定である清沢満之、曾我量深、金子大栄、安田理深の英訳論文集(An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings)に収める序文やビブリオグラフィーの原稿を整理し、完成させた。本研究班嘱託研究員マーク・プラム氏を招き、検討会を重ねた上での作業であった。

## 〈ドイツ・フランス班〉

### 1. 2006年11月30日(木) 13:00～、12月1日(金)

10:00～ 響流館4階メディアホールにおいて、「大谷大学真宗総合研究所・フランス国立高等研究院(EPHE)合同シンポジウム：宗教と近代合理的精神——日仏文化の比較をとおして」を開催した。

門脇健研究員による基調報告「世俗化とライシテ」をはじめ、マイケル・バイ嘱託研究員による「現代日本における市民宗教」、藤枝真研究員による「現代日本の終末期医療における仏教と医療の関係」、井上尚実研究員による「地獄の喪失——宗教的宇宙観の衰退と日本の近代化」、阿部利洋研究員による「お骨と死生観——現代日本における葬送の新たな取り組みから」の発表が行われた。

また、EPHEからは、ジャン・ボペロ教授「現代フランスにおける政教分離と宗教」、セヴリーヌ・マテユウ教授「医療と宗教における死の世俗化」、ハルトムート・ロータモンド教授「神道、仏教の近代化及び宗教観再考—明治宗教学史の一ページ—」、ジャン＝ポール・ヴィレム教授「ウルトラモダンの文脈における宗教」の発表、そしてボペロ教授の総括があった。

なお、2008年度に本シンポジウムの発表およびモデレータのコメント原稿を収録した報告集を日本語で刊行する予定である。

2. マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシユ教授の著書『マルティン・ルター』の翻訳作業を進めている。翻訳終了次第、出版という形での公表を計画している。

## 〈中国班〉

中国東北地域(いわゆる満洲)と東部モンゴル地域(内モンゴル自治区東部)における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料による再構成及び現地調査によって明らかにするために、今年度は以下の研究活動を実施した。

### 1. 大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料(通称：田代文庫所蔵)の目録作成

2005年度に開始した中国東北・東部モンゴル地域関連資料の目録作成作業を今年度も継続し、旧満洲関連の綴資料(仮番号8～12)の目録作成作業を完了した。

また、これと関連して、2007年2月21日(水)に「大谷大学所蔵東本願寺中国布教関係史料整理の課題—現況の報告および今後の活動について—」と題して、木場明志教授より基調報告がなされた。

### 2. 中国東北師範大学との共同研究「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

8月24日(木)～29日(火)、桂華、松川の研究員2名は、木場教授と共に中国東北師範大学(長春)を訪問。中国側参加者とともに、吉林省の長春・松原、内蒙古自治区の烏蘭浩特、葛根廟にて共同現地調査を実施した。

12月1日(金)～10日(日)、招聘研究員として曲曉範・劉景嵐両氏(東北師範大学)が本学にて研究活動を実施した。この間、下記の通りの公開研究会を開催した。

12月8日(金) 16:10～18:00 (於：響流館3階 マルチメディア演習室)

○偽満洲国の「靖国神社」——「新京建国忠霊廟」の建築過程及び偽満当局がそこで挙行した祭祀活動——東北師範大学歴史文化学院 曲 曉範 教授

○内モンゴル東部地区におけるラマ教の影響と改革 東北師範大学歴史文化学院 劉 景嵐 副教授  
通訳 東北師範大学外国語学院 林 嵐 教授

2007年1月31日(水)～2月1日(木)、松川研究員が東京に出張し、大東文化大学に滞在中の劉厚生・東北師範大学歴史文化学院教授、林嵐・東北師範大学外国語学院教授と会談し、劉厚生教授が専門とする清朝史及び中国

東北地方におけるシャマニズムの歴史的沿革と現況について、意見を交換した。

2007年3月27日(火)～3月31日(土)、桂華・松川の両研究員は中国東北師範大学(長春)を訪問。双方の研究状況を報告しあい、今後の活動について打ち合わせを行った。また、北京においては中国仏教協会を訪問し、中国社会科学院世界宗教研究所のジャミヤンカイチョー(嘉木揚凱朝)氏、中央民族大学のウルジーバヤル(烏力吉巴雅爾)氏、中国仏教協会国際部日本科科长李賀敏氏と、小栗栖香頂をはじめとする中国布教者関連史料として中国側に残されているものに関して意見を交換した。

## 西藏文献研究

# チベット語文献の データベース化

チーフ・教授 福田 洋一  
(仏教学)

本研究は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、2006年度は、以下の課題に取り組んだ。

### (1) 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化

#### A. 北京版チベット大蔵経の研究

1930～32年に刊行された『甘殊爾勘同目録』は、絶版となって久しいが、すぐれたレファランスとして、復刊を望む声が大い。そうした声に応えるべく、現在準備を進めており、その一環として補訂必要箇所の抽出と確定作業をおこなった。この作業は、2005年度内に完了しており、その成果を2006年度内に発表する予定にしていたが、公表に足る十分な整理ができていなかったため、これを見合わせた。

また、北京版チベット大蔵経所収のテキストに対する研究もおこなった。対象としたテキストは、世親造『縁起経釈 (rTen cing 'brel par 'byung ba dang po dang mam par dbye ba, Pratītyasamutpādavyākhyā)』(Pek.5496)である。本テキストは、世親の縁起観を表明しているものであり、彼の思想的変遷を知る上で極めて重要なものである。

2006年度は、北京版にもとづきテキストを入力し、デルゲ版との校合をおこなった。

#### B. 蔵外チベット語文献の研究

この研究には2つの柱がある。1つは、大谷大学図書館所蔵蔵外チベット語文献のうち稀観書の公開であり、もう1つは公開を目的としたチベット語文献電子テキスト化である。

前者の研究としては、稀観書の1つであるゲイェ・ツルティムセンゲ (dGe ye Tshul khirms seng ge) 著『インド・チベット仏教史 (rGya bod kyi chos 'byung rin po che)』(チベット蔵外No.11847)の校訂テキストを、人名・地名索引および影印を付して出版し、関係研究機関や研究者に配布した。

後者の研究としては、複数のテキストの電子化をおこなっている。まず第1にあげるのは、プムタク・スムバ ('Bum phrag gsum pa Byams pa chos grub, 1433-1504)『俱舍論語義解明・善説の陽光 (Dam pa'i mngon pa mdzod kyi tshig gi don gsal bar byed pa'i bstan bcos legs par bshad pa nyi ma'i 'od zer)』(大谷チベット蔵外No.13972)である。本テキストは、すでに「大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書」として影印公開されているものの、内外の研究者に十分に活用されているとは言い難い。ウメー書体で縮略文字が多用されている写本であることがその理由の一つであろう。そこでこの研究では、本テキストを利用しやすい形で提供するため、縮略文字もすべて正規の綴りに直して入力作業を進めている。2006年度は全章のうち、第1、2、6、7、8章の入力を終了した。

また、『マルパとミラレーパ小伝 (Mar pa dang mi la ras pa'i mam thar)』(大谷チベット蔵外no.11814)、当班所蔵のチベット語文献のうち、チベット歌舞劇の演目の1つ『ドワ・サンモ伝 ('Gro ba bzang mo'i mam thar)』の読本、ツァンニョン・ヘールカ (gTsang smyon he ru ka Rus pa'i rgyan can, 1452-1507)『マルパ伝 (sGra bsgyur mar pa lo tsā'i mam par thar pa mihong ba don yod)』の電子化をおこなった。『マルパとミラレーパ小伝』ならびに『ドワ・サンモ伝』は電子化作業が終了し、Web上にてこれを公開した。『マルパ伝』は入力作業が終了、現在校正作業中である。

さらに、研究補助員・目片祥子より『サキャ・パンデイタ伝スドーマ (Sa skya paṇḍita'i mam thar gsung sgron ma)』の電子化校訂テキストの提供を受け、これをWeb上で公開した。

#### (2) 国際学会への参加

2006年8月27日から9月2日までボン大学中央アジア

学講座 (Zentralasiatische Seminar, Universität Bonn) がホストとなって、ドイツ・ケーニッヒスヴィンターにて開催された第11回国際チベット学会 (11th Seminar of the International Association for Tibetan Studies) に研究員・白館戒雲、三宅伸一郎、嘱託研究員・井内真帆の3名が参加し、それぞれ「Bod kyi sgra snyan ngag 'phel rgyas dang bdag dang 'khrungs yul gcig pa'i dpang lo (チベット声明学・詩学の発展と私と同郷のパン翻訳師)」「O tha ni gtsug lag slob chen gyi bod yig dpe rnying zhib 'jug skor (大谷大学のチベット古写本研究について)」「bKa' gdams pa Manuscripts Discovered at Khara-Khoto in the Stein Collection (スタイン収集カラホト出土のカダム派写本)」と題する研究発表をおこなうとともに、各国の研究者との交流を深めた。詳細については、『研究所報』No.49所載の報告を参照されたい。

### (3) 公開研究会の開催

10月30日には、アメリカのチベット仏教研究の第一人者J. ホプキンズ氏 (ヴァージニア大学名誉教授) とチベットに関する総合学術情報サイトTHDLのマネージャーであるS. ワインバーガー氏をお招きし、アメリカにおけるチベット研究の動向についてお話いただいた。また、11月29日には、ジャルサン氏 (内蒙古大学蒙古学学院教授) をお招きし、「アルシャー南寺における化身ラマの系譜について」をテーマにお話をうかがい、チベット・モンゴル仏教に特徴的な「化身ラマ」制度についての理解を深めた。

### (4) TLKのバージョン・アップ

MacOSX対応Tibetan Language Kit (TLK) のバージョンアップのための作業をすすめた。この作業にはおもに、嘱託研究員・野村正次郎ならびに同ステイブ・ハートウェルの両氏があたった。10月に、Otani Unicode Tibetan Language Kitと名前を改め、そのインストーラーおよびコンバータをふくめたPublic Beta版を公開した。

### (5) パーリ語文献研究

近年東南アジア独自の仏教受容のありかたを示すものとして「擬経ジャータカ」と呼ぶべきものが注目を集めている。本学図書館所蔵パーリ語貝葉写本のうち『パンニャーサ・ジャータカ』も、そうしたものの1つである。『パンニャーサ・ジャータカ』関係資料の収集・調査と、現地研究者との意見交換のため、嘱託研究員・清水洋平が2007年3月14日から24日までタイに出張した。詳細については、『研究所報』No.50掲載の報告を参照されたい。

### (6) その他

近年チベットでは、これまで稀観書であった文献が次々公開されている。そのうち、今後の研究のため重要となるであろう「カダム全集 (bKa' gdams gsung 'bum phyogs bsgrigs)」(全30冊)や「ディクン・カギュー法蔵 (Bri gung bka' brgyud chos mdzod)」(100冊)を購入した。購入にあたっては、嘱託研究員・井内真帆が尽力した。

## 真宗本廟 (東本願寺) 造営史研究

### 真宗本廟 (東本願寺) 造営史料の研究並びに『真宗本廟 (東本願寺) 造営史』の編纂

チーフ・教授 木場 明志  
(国史学)

「真宗本廟 (東本願寺) 造営史研究」は、宗祖親鸞聖人750回御遠忌の記念事業として、2000年以来、本山御遠忌本部が進めてきた「両堂再建史料の研究・整理・保管」について、真宗大谷派と本学との間で業務委託契約を締結し、昨年度発足した研究プロジェクトである。なお、本プロジェクトは、2009年度までの4年間を研究期間とする。

東本願寺所蔵史料の調査は、1990年以来続行されており、漸次その全容が明らかになりつつあるが、その6万点以上の古文書・古記録類の中に、両堂再建を中心とする真宗本廟造営に関する史料は6千点にもものぼる。本研究においては、それら本廟造営史料の調査・整理・研究を進め、本廟の造営再建の歴史を明らかにすると共に、『真宗本廟 (東本願寺) 造営史』(仮称)の編纂を行うことを目的とする。とくに編纂事業については、歴史・建築・美術・工芸・防災等の諸方面に寄与すべく、信仰史・教団史を基盤に真宗本廟の具体的な諸相を描き出し、真宗門徒の帰依処としての存在意味を確認したい。

真宗本廟は、宗祖親鸞聖人の示寂後、1272 (文永9)年に東山大谷の地に草創され、本願寺第七世存如の頃には、御影堂・阿弥陀堂を備えた両堂形式になったとされる。江戸初期の1602 (慶長7)年、徳川家康による寺地寄進を経て、烏丸七条に寺基を定めて東本願寺が創立されると、1661 (寛文1)年の親鸞聖人四百回忌を契機に改築が行われ、その威容を誇る大建築となった。その後、1788 (天明8)年、1823 (文政6)年、1858 (安政5)年、1864 (元治1)年の四度に及んで罹災焼失し、その

たびに再建が行われて、現在の建築は1895（明治28）年に竣工した。

こうした焼失と再建の歴史の中で、明治度造営に関しては、経過・教化体制・職人組織・部分請負的寄進・門徒参加などの諸問題が明らかにされてきたが、今般の研究では、新たに発見された東本願寺所蔵の再建造営史料群の利用を通して、江戸期における再建造営の諸相について、その全般的な把握を課題とする。そこで昨年度は、まず全体の研究推進計画を立てると共に、事務連絡会議および全体会議を開催し、再建造営をめぐる諸問題点の共有化を図った。さらに今年度にわたって、『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の編纂において核となる造営史料の精査・分析が継続されている。その具体的な研究活動と経過について示せば、以下の通りである。

研究推進計画では、Ⅰ. 造営史の全体像の把握、Ⅱ. 史料調査、Ⅲ. 史料翻刻、Ⅳ. 国内史料調査、Ⅴ. 『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の目次作成、Ⅵ. その他、の各項目を立て、それぞれが有機的に連関するように研究が進められている。

まずⅠ. 全体像の把握では、本山機関紙によって明治度造営進行過程史料を整理すると共に、その図表化から作事組織のあり方と変遷、担当部署における事業内容の把握が行われている。また江戸期造営に関しては、関係史料の抽出・写真撮影を行い、それぞれの再建時ごとに分類・整理・分析を進めている。

Ⅱ. 史料調査については、東本願寺所蔵史料の内、財務部所管両堂再建史料に関しては、段ボール230箱（約6,000点）中、1箱～23箱、200箱～230箱の調査が終了し、残る24箱～199箱は、優先史料を選び出して精査を行っている。なお、上記史料群の中で『献木上申書』『献木適用簿』についてはデータベース化が図られ、明治度造営における献木状況や寄進の動向が把握されつつある。さらに諸国詰合、世話方、示談方の人名データベース化が進められており、在地から集まる材木の動きと共に、献木を仲介した人々やその組織の実態についても分析が行われている。また、真宗総合研究所に移管借用した本山史料に関しては、江戸期から明治度に至る焼失・再建関係史料の分類・整理・分析が順次に行われており、今までは明らかでなかった再建造営の具体相が次第に解明されつつある。

Ⅲ. 史料翻刻については、造営・焼失・再建の全般的な動向を把握するため、東本願寺所蔵史料の中でも、それに直接関わる日記・記録類を選び出し、重要度に準じて写真撮影を行い、全文翻刻または関連記事の抄出翻刻を進めつつある。

Ⅳ. 国内史料調査では、本学図書館・博物館をはじめ、

他機関所蔵の関係史料や既刊の活字史料の調査・収集・翻刻を行い、また名古屋工作支場跡地確認や、越後尾神嶽殉難地における聞き取り調査など実地踏査を実施しており、造営史全般のさらなる理解に努めている。

また、今回のプロジェクトには、学外から建築工学・建築史分野の第一線の研究者に加わって戴いてところにて特色があり、東本願寺所蔵史料の中に多数伝来する諸図面類の調査・分析を通して、東本願寺の建築学的な特徴の解明や、寺院建築史における新しい位置付けなどが期待される。

Ⅴ. 『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の目次作成については、本研究の成果を具体的に明示するものであり、上記にみてきた研究推進計画の各項目が有機的に結合する中で見極められなければならない。これについては、今しばらく研究成果の集約を俟って、今年度中には原案を取りまとめていく予定である。

Ⅵ. その他として、定期的実施される公開研究会と個別課題の報告会は重要であろう。昨年度は2回、今年度もすでに2回の公開研究会を開催し、多数の貴重なご意見を頂戴することができた。

第1回目：伊藤延男氏  
（講題「造営史への期待と課題」）

第2回目：川上貢氏  
（講題「真宗本堂の規模と形式—他宗派寺院本堂との比較—」）

第3回目：永井規男氏  
（講題「本山建築の造営と意匠研究の方法論」）

第4回目：木場明志氏  
（講題「仏教再興と明治度造営」）

また、個別課題の報告会では、各データベースの活用法や、両堂再建史料の性格ならびにその基礎的な考察についての検討が鋭意行われており、目次作成に向けての活発な意見交換がなされている。

最後に、次年度以降の研究計画を示せば次の通りである。2008年度は、上記した両堂再建関連諸史料の調査・研究を継続し、『真宗本廟（東本願寺）造営史』各執筆者からの種々の要望に応じると共に、原稿執筆・編纂作業を積極的に進めていく。2009年度中には、本文および諸史料の校正作業を行い、本プロジェクト終了後、本山御遠忌事務局において、2010年11月に刊行する計画である。今後とも研究活動を推進し、内外の期待に応え得るよう内容の充実を図り、多角的かつ質の高い『真宗本廟（東本願寺）造営史』を構想していかねばならないと考えている。



## 2006(平成18)年度「一般研究」研究結果概要

### 共同研究

#### 北里蘭蠟管資料群の分析と その同定：台湾を中心に

研究代表者・准教授 山本 貴子  
(図書館情報学)

2005年度、真宗総合研究所一般研究の「蠟管音源のデジタル化：蠟管蓄音機の再現」において、北里蘭管についての研究を行った。一方、北里蘭博士は、蠟管の録音状況を記録した図書を数冊出版している。北里の蠟管の情報を同定識別するにはこれらの資料の分析を欠かすことができない。この資料を分析した結果、これらの資料は、ある一定の形式で記述されていることがわかった。特に台湾では調査地ごとに、調査地の選択方法、録音者の氏名・性別と時には年齢、蠟管番号、録音内容の解説、写真の説明、各部族からのスピーチと、各地の情報が記述されている。調査方法は、社会調査としての、いわゆるサーベイである。また、北里が日本語の語源について仮説を立てる段階で採った方法は、統計的手法であった。

北里がどこでどのようにしてこの研究手法を得たのだろうか。あるいは、独自に考え出したものだろうか。本研究では、ドイツでの留学時にこの手法を学んだのではないかと仮説を立て、証明しようと試みた。

そのため、まず、北里が所属した国内外の大学で、どのような科目を受講したかを調査した。北里が、日本語源の研究に着手したのはライプチヒへの留学時代であり、それまでは文学、その中でも戯曲について研究していた。したがって、国内での大学の受講科目には、それが現れてこないと仮定した。國學院大學では校友会に問い合わせた結果、北里が在籍していた当時の講義科目は、古今集や萬葉集などの国文、史記列伝や詩経などの漢文、国史、哲学などであった。同志社大学では、受講科目の問い合わせについて返答がなかったが、北里が記述した資料から、英語学が中心であり、社会科学を学んでいなかったことは間違いない。

ドイツでは、北里が留学していたミュンヘン大学とライプチヒ大学、特に、ドイツ留学時代後半のライプチヒ大学での受講科目を調査した。その結果、ミュンヘン大

学で研究したのは、演劇論やファウスト、マクベスなどの演劇、文学史などが中心であった。その後のライプチヒ大学で、公文書館に保管されていた受講科目リストから、音声学、文法などの言語学関係の科目が急に増えたことがわかった。さらに、ライプチヒ大学図書館で調査した結果、北里が教授された研究者から、社会科学的な考え方や手法を学んだ可能性があることがわかった。

さらに、北里が他の留学生と接触することでヒントを得た可能性や、北里の下宿先から、その近くの研究機関に所属する人たちとの接触で学んだ可能性を探った。下宿の近くに工科大学があり、また、出版された雑誌などから他の留学生とも親交を深めていることはわかったが、今回の調査では、本研究との関係を示すものを探し出すことはできなかった。

### 共同研究

#### 法苑珠林の総合的研究

研究代表者・教授 若槻 俊秀  
(中国哲学史)

唐・道世撰『法苑珠林』一百巻は、既に散佚した翻訳経典や中国で作られた偽経が保存されており、漢訳仏典や、中国仏教学、仏教史の研究にも重要な資料を提供する貴重な書である。また説話類が多く収録され、文学研究の領域からも重要なものである。しかしながら、本書は従来あまり研究されておらず、とりわけ体系的な研究はほとんど存在しない。そこで当研究班が目指したのは、まさに『法苑珠林』を体系的に捉え、多角的に分析することであった。当研究班では二つの形式の研究方法を並行して進めてきた。

一つは版本研究、受容史、研究史などに関わることで、班員が個別に調査・研究を進める形で行ってきた。『法苑珠林』には歴代の大蔵経に収録されているもの、私版で単行されたものなどがあり、版本間の異同が大きい。従って、版本比較なくして的確な校訂は見込めない。また各巻の末尾に音釈が付されるものもあり、この分析によって、版本系統の一端が明らかになった。また『法苑珠林』には和刻本も存在するが、ここに付される訓点の

詳細な分析も進められ、このことによって我が国における『法苑珠林』研究の実態も明らかになって来た。これらの成果は、いずれもそれぞれの研究を担当した班員によって近く公表される予定になっている。

もう一つの研究の主題は『法苑珠林』に引かれる大量の仏教説話に関する分析で、これは『法苑珠林』各篇におけるそれぞれの説話の位置づけを考えることから、『法苑珠林』全書の体例および編集方針を明らかにすることを企図したものである。こちらは班員が定期的に会読を実施する形式で行ってきた。

具体的には、本書の各篇または各部の末尾に置かれる「感応縁」に収録される仏教説話に検討を加えてきた。『法苑珠林』の表現する仏教観の一端を窺い知ることはもちろん、『今昔物語集』など我が国の文学にも多大な影響を与えたこれらの説話群を研究することで、中国および日本の仏教文学研究にも寄与し得ると考えたからである。

そして「感応縁」にも多くの書からの引用があるが、我々が主として検討を加えたのは齊・王球撰『冥祥記』の佚文である。『冥祥記』は六朝期の志怪小説集として重要なものであり、魯迅の『古小説鈎沈』での輯佚・整理をはじめ、部分的な訳注も存在するのであるが、いずれも不十分で問題点もなお多く存するので、新たに検討し直し、校訂・訳注を作成し公表することにしたものである。なお魯迅は『古小説鈎沈』において『冥祥記』を蒐集するにあたり、逸話の内容の時代順を以て排列しているが、我々は『法苑珠林』の体系を考察するものであるのでこれには拠らず、『法苑珠林』の篇・部の体例に拠って排列した。

会読には上記の目的を達成するために、当研究班に所属する、仏教学、中国文学、国文学、また哲学、語学などの多方面の専門家が参加した。このことにより、我々は単に『冥祥記』の定本策定という目的だけにとらわれることなく、多角的な分析を行うことが可能であった。会読を通じ、版本間の差異やそれぞれの説話に表現される仏教観、日本文学との関わりなどが数多く指摘され、活発な議論が行われた。また、各篇・各部単位について、編者の編集方針における感応縁の位置づけ、そこで表現したかった意図など、『法苑珠林』全書を通じての体例も明らかになった。

また会読を通じて見出された諸問題についても考察を加えてきた。例えば語彙の問題である。仏教語と一般語とを問わず散見される語義未詳の語や、口語語彙などについては、語彙史の観点から詳細な分析を行っている。これは仏教学、仏教史、中国語学等の研究者が会読に参加したことによって可能であった。また『冥祥記』の成

立史にも注意を払い、『冥祥記』に先行する『観世音応驗記』や少し後の『高僧伝』、あるいは『法苑珠林』と同時期もしくはそれ以後の『集神州三宝感通録』や『太平広記』等の関連諸書との比較も行った。

我々は『法苑珠林』中の『冥祥記』全佚文の校訂を行い、訓読・語注を施す作業を行った。完成した訳注は『真宗総合研究所研究紀要』第25号にて公表する予定である。これは単なる訳注に止まるものではなく、上記の諸問題に対する研究成果が全て盛り込まれており、仏教史、日中の文学など、多方面の研究に資することの出来るものとなっている。

## 共同研究

### 仏教と教育の関係性に関する哲学的・臨床的研究 —「心の教育」の所在を探る—

研究代表者・教授 皇 紀 夫  
(臨床教育学)

本研究は2年間の継続研究であるため、現時点での報告は中間的なもので、しかもその内容は今後の研究論議によって修正され得る仮説的な性格のものである。現在までの作業は、仏教と教育を関係付ける資料の収集(仏教系大学・短大の大学案内やシラバスなど及び大学関係者の面接記録)を終えて、それらの分析を進めている所である。これらの資料は、仏教と教育と学問を結ぶ文脈を、仏教教育関係者が分かりやすく語ったいわば自己正当化の「大いなる物語」であり、その教育論は「知の制度化」として表現された一種の作品であると言える。言説の内容はもとより、その語りのスタイルや用語法さらには宣伝効果をねらったレイアウトなど、たかが受験生向けの大学案内であり情報提供冊子に過ぎないが、しかし、仏教系の大学がその社会的役割と責任とを社会に表明する貴重な資料なのである。大学は、それぞれの建学の精神や理念を自前の言葉と文脈で語り、存立の基礎づけと自己正当化の作業を公開しているわけで、そこでの仏教的メタ言説に拠る教育論と学問論を哲学的あるいはレトリック論的に分析することは、現代における仏教と教育と学問との関係構造を理解するひとつの試みとして位置付けられてよいだろう。問題はこれらの資料をどのような方法によって分析して解釈するかである。本研究では、臨床教育学が教育界における問題言説を分析解釈

するための方法として開発してきた臨時的なレトリック論の手法を参考に、先の資料解釈を試みるものである。その意味で、本研究の立場は、反省的自己解釈による広義の脱構築主義の系譜に属するものと考えている。

たとえば、最近の教育現場で頻発する深刻かつ理解困難な問題への対応策のひとつとしてこころの教育が話題になっており、仏教系大学においても心言説で建学の精神を語るものが少なくない。本研究においても、心の教育言説を注視している。しかし、先の立場からすれば、教育や人間世界の難問を心教育言説に還元する心一元主義的な本質論的教育観には厳しい批判的吟味を加えなければならない。つまり、心の教育を仏教用語で語りそれを final vocabulary として自足する教育論、いわば伝統的な基礎づけ主義の発想にたいして批判的であること、その語りのスタイルに対して差異を仕掛けること（この役割こそ、むしろ仏教的な教育論に期待されていると考えているが）、この方法論的な自覚が最近の教育学研究革新の基調として要請されている。

ポスト世俗化の時代とか宗教なき宗教の時代などが話題となり、信仰と不信仰の境界が消えて不信仰と信仰という二分法が機能でなくなったポスト状況にあつて、教育言説が理論的にも実践的にも直面している非基礎づけ主義の挑戦を無視して、特権的地位を宗教言説だけが守っているとは思えない。少なくとも宗教教育にかかわる分野においてはその衝撃を免れるものではないと言えるだろう。仏教教育あるいはその実践的な展開領域としての心の教育論が、仏教的真理の普及を図る啓蒙化された知的形態として、教育においてその希釈態として提示されているのではないか、この問いかけを可能な限り持続させ、仏教と教育の関係性の構造と形態とその問題を解明したいと考えている。本研究はこうした課題に向けての端緒となることが期待されている。

本研究では、こうした課題意識のもとに、差当って、先の資料を以下の観点から分析して、その言説の特性を抽出しそれらの類型化を目指している。

### 1) 仏教言説分析の観点

- ① 宗教本質論（「仏教とは・・・である」と言う明示的言説の有無とその根拠づけの仕方〈仏典、教祖、建学者など根拠付けと系譜のレトリック〉）。
- ② 象徴的神話的言説の特性（宗派と教団の独自性の強調、確信的言説、終極的語彙、儀式的語態、教化のレトリックなど）。
- ③ 近代社会に適合する順応言説（現実適応、肯定、未来志向、楽天的言説など）。
- ④ 近代社会批判の対抗言説（現代批判、価値相対化、悲

観論、内省的贖罪言説など）。

- ⑤ ③と④を結ぶ接続の語法（順接的接続、逆説的接続など）。
- ⑥ 最終的な語句の口調と説得の技法（規範性と事実性と遂行性〈命令、共感、勧誘、反語など〉）。
- ⑦ スローガンの有無（決まり文句、常套的言い回しと語句）。

### II) 教育言説分析の観点

- a) 教育論と学問論の有無とその用語法。
- b) 仏教と教育を結ぶ共同化のレトリック（共同化の文脈と優先順位、人間主義、心主義、精神主義、宗教教育における公/私原理など）。
- c) 仏教（宗派）的言説の一般化か自己限定か（仏教教育の目的と課題の設定方法）。
- d) 仏教教育（宗教教育）の内容と形態と方法（授業の形態と方法、仏教行事、空間配置と命名の仕方など）。
- e) 仏教教育（宗教教育）に関するカリキュラムとスタッフ（仏教授業の位置付け、シラバスの分析など）。

以上の観点から資料の分析を進めているが、これらの観点は資料を読む過程で取り出された仮説的なもので、まだ理論的な検討を経ておらず修正の余地が多いが、現状として報告しておきたい。

## 共同研究

### 新発見の安慧『俱舍論実義疏』 梵文写本の研究

研究代表者・教授 小谷 信千代  
(仏教学)

本研究は、チベットのポタラ宮で発見されたステイラマティの『俱舍論』注釈書のサンスクリット写本を解説し出版することを目的として出発した。

ヴァスバンドウの『俱舍論』はインドのみならず各地域に伝播し、それによってさらなる学問の伝統を生み出してきた。ただ残念なことに、インドで著された主要な『俱舍論』注釈書のサンスクリット原典はヤショーミトラの『俱舍論明瞭義』が現存するのみであった。ところが、近年ウィーンのInstitute for the Cultural and

Intellectual History of Asia, Austrian Academy of Sciences と、北京の中国蔵学研究中心との協力によって、六世紀頃のインドでステイラマティ（安慧）によって著された『俱舎論』の注釈書『俱舎論実義疏』サンスクリット写本の存在が明らかになり、幸いにしてそれを参照することが可能となった。

『俱舎論実義疏』の内容の詳細さや分量の膨大さは、ヤショーミトラの『俱舎論明瞭義』をも凌ぐほどで、最も重要な『俱舎論』注釈書のひとつである。

『俱舎論実義疏』には、チベット大蔵経各版本の論疏部中、雑部に収められているチベット語訳と、漢語から翻訳された古代ウイグル語写本と、チベット語訳からのモンゴル語訳、また、北京図書館に所蔵されており蘇軍によって公表された敦煌出土の漢語断片、そして、パリのBibliothèque Nationaleに所蔵され、『大正新修大蔵経』に収録された敦煌出土の漢語断片がすでに知られている。チベット語訳およびモンゴル語訳は完本であるが、それ以外は部分的に残存するものであったり、抄訳あるいは備忘録ではないかとも推測されている。いずれにしてもチベット語訳と厳密に対応するテキストではない。サンスクリット文に最も忠実であろうと思われるチベット語訳も、当時のチベット語訳者が当該コロフォンにおいて言及している通り十分な翻訳ではなく、またチベット文が難解であることも手伝って、今日まで部分的な研究がなされてきたにすぎない。

本研究は、このような研究状況のもとで、あらたに発見された『俱舎論実義疏』第1章「界品」の写本解読研究を開始したのである。

今回確認された『俱舎論実義疏』サンスクリット写本は全部で137葉である。チベット大蔵経テンギュル（雑部）に収められ伝承されてきたチベット語訳『俱舎論実義疏』は、『俱舎論』第9章「破我品」をのぞく第1章「界品」から第8章「定品」の注釈である。当該サンスクリット写本もチベット語訳の通り第1章から第8章に対する注釈であることが確認できる。『俱舎論実義疏』の場合、第9章の注釈はやはりもとよりなかったことになる。ただし今回発見された『俱舎論実義疏』写本は第2章「根品」の中程から第4章「業品」の中程までを欠いている。これら欠落箇所は注釈書全体のほぼ1/3に相当する。欠落箇所を境に前半と後半とは明らかに異なったスタイルで書写されている。よって便宜的に前半を写本A、後半を写本Cとし、欠落しており実際に現在確認することは不可能であるが、あいだにあるべき箇所を写本Bと記号付けしておく。写本Aは1葉に8～12行分の文字が書かれ、写本Cは1葉に12～13行分の文字が書かれている。写本の書体は9世紀を下るものではないと

推測される。

また、各章の終わりにチベット文字で以下のような記載がある。

[A-45b] slob dpon btsun pa blo brtan...

mdzod kyi gnas dang po rdzogs so /

[A-58b] mdzod kyi gnas gnyis pa'i smad ltos che ba dang / gnas gsum pa ril po / bzhi pa'i stod nmams bar 'dir ma tshang 'dug /

[C-14a] gnas bzhi pa rdzogs so /

[C-35a] gnas lnga pa rdzogs so /

[C-56b] gnas drug pa rdzogs so /

[C-69b] gnas bdun pa'o /

[C-79b] blob dpon btsun pa blo gros brtan pas sbyar ba mdzod kyi nmam par bshad pa'i rgya cher 'grel pa'i gnas brgyad pa rdzogs so / don gyi de nyid ces bya ba ma ...

『俱舎論実義疏』サンスクリット写本の解読を始めるにあたり、まず関連する下記の基礎資料を準備しながら、数人の研究者が定期的に解読の研究会を開き解読作業を行ってきた。

- ・『俱舎論』本論のサンスクリット・チベット・漢文、そしてヤショーミトラの注釈書『俱舎論明瞭義』のサンスクリット・チベットの対照ノート
- ・『俱舎論』本論の偈頌の対応箇所、関連文献の対応箇所を記した『俱舎論実義疏』チベット語訳ノート
- ・『俱舎論』本論の偈頌の対応箇所、関連文献の対応箇所を記したプールナヴァルダナの注釈書『俱舎注疏随相』チベット語訳ノート

『俱舎論』は、第1章「界品」で「アビダルマとは何か」について解説する（『俱舎論』2偈・3偈 Pradhan校訂本 pp.2-3）。本研究においては、当該箇所に対応する『俱舎論実義疏』サンスクリット写本（写本A 8b4-10a5）の解読をまず試みた。現在すでに解読を終え、なお引き続き継続して第1章「界品」の写本解読を遂行中である。いまだ継続して取り組まなければならない多くの課題を残してはいるが、研究の詳細は今後随時様々なたちで学界に報告し、最終的には『俱舎論実義疏』の校訂本（Critical Edition）を作成して出版する予定である。

## 個人研究

『量評釈』第2章に対するチベットの註釈の研究  
—仏道体系の理論と実践—研究代表者・教授 白館 戒雲  
(仏教学)

インドにおいて因明(仏教論理学・認識学)はディグナーガの『集量論』、その評釈であるダルマキールティの『量評釈』などにより確立された。以降、因明は中観、唯識の哲学や外教の諸学派にも多大な影響を与えた。インド仏教の滅亡後を、13世紀初めにシャーキャシュリーバドラがチベットに入り、因明を伝えた。以降、サキャ派でも『量評釈』が学ばれた。ツォンカバ・ロサンタクパ(1357-1419)やその高弟タルマリチェンなど初期ゲルク派の人たちも、当初その伝統で学んだ。当時、因明は世俗の学問にすぎないといった評価もあったが、ツォンカバはそれを改めた。すなわち、無常、空性など凡夫にとって不明瞭な事柄は正理を通じて決定することが必要であるとし、因明により唯心、中観の哲学を基礎づけたのであった。ツォンカバは因明について大きな著作を残さなかったので、註釈の著作は弟子たちに任せられたが、最も重要なのが、ギャルツァブ・タルマリチェン(rGyal tshab Dar ma rin chen. 1364-1432)の大著『解脱道作明 *Thar lam gsal byed*』(Toh. No.5450 Cha)である。因明は学問寺での主要5教科の一つであったが、ゲルク派では『解脱道作明』を中心に修学された。インド以来の因明の結論がそこに完成されたと考えられたのである。

本研究ではその第2章の翻訳研究を行った。手法として『量評釈』の偈頌はMIYASAKA, Yūsho ed. (1971/72)、『解脱道作明』はタシルンポ、ラサ、ヴァーラナシーの三本を用い、さらにインドの註釈、特にデーヴェンドラブッディとブラジュニヤカラグプタの註釈を中心とし、さらにチベットの註釈文献としてケドゥップ・ゲルク・ペルサンポやパンチェン・ソナムタクパの註釈文献、さらに現代の研究や翻訳を参照して、翻訳し訳註を付けた。

第2章「量の成立」は『集量論』の帰敬偈に示された「量となった者」「衆生を利益したい者」「教主」「善逝」「救護者」の五称号を解説し、他の四称号を通じて仏世尊こそが解脱の希求者にとって「量(権威、認識基

準)となった者」であることを論証する。そこでは、因である思惟と行動の円満二つ—大悲と、無我の智を数習する教主—から、果である自利の円満—障の断除と智・悲の証得—と利他の円満—道を他者に教えて利益すること—との二つが、生ずるとされる。他の理論や実践によってではなく四聖諦の証悟により解脱があること、苦行や儀式でなく輪廻の根本たる有身見を無我の智恵により断つべきこと、仏道において慈悲が最重要であることが説かれている。

そのvv.144の註釈はすでに拙稿「タルマリチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 *Thar lam gsal byed*』第2章「量の成立」試訳(1)」(『真宗総合研究所 研究紀要』23, 2005)として発表したもので、本年度はvv.45-131abの註釈を同(2)として『同研究紀要』24, 2006 pp.1-82に発表した。この部分は思惟の円満に関する論述である—まず輪廻の存在を証明し、外道の唯物論を論破する。さらに、輪廻転生における数習により仏陀の徳性が完成されたことを論証している—心身論を明らかにし、無我の智恵や利他の慈悲の重要性、仏陀が小乗の阿羅漢より勝れていることが明らかにされている。(なお、第3章「現量」に関しては、量の数を明らかにするvv.1-35を同様の手法により翻訳研究し、ツルティム・ケサン他『タルマリチェン著『量評釈の釈論・解脱道作明 *Thar lam gsal byed*』第3章「現量」の和訳研究(1)」(『成田山仏教研究所 紀要』30, 2007) pp.237-307として発表した。)

また補助的研究としては、第2章の内容はチベットでは道次第(ラムリム)であるともされているので、ミラレパの法嗣でカギユ派の祖ガムポバ・ソナムリンチェン(1079-1153)の『解脱莊嚴 *Thar rgyan*』を全訳研究し、ツルティムケサン他『解脱の宝飾』(Unio 2007)として公刊した。また道次第に関係が深い『宝徳蔵般若経』をインド、チベットの註釈を参照して翻訳研究し、ツルティム・ケサン他「チベット語訳『宝徳蔵般若経』の和訳研究」(『法談』52, 成田山法談会 2007)として発表した。

またツォンカバの中観学は、中観帰謬論証派の主張をダルマキールティの論理学により基礎づけたことが知られている。その内容を解明するために、仏教の中心的教理である縁起にちなんで、縁起と空の関係、言説を設定する縁起という二点から研究した。研究対象としてはツォンカバの論述を、ゲルク派の学者テンダル・ハラムパが整理し分析しているものを研究翻訳し、白館戒雲「縁起に関する考察—チベット撰述の資料から—」(『仏教学セミナー』84, 2006)として発表した。

個人研究

日米関係史における日本人とアフリカ系アメリカ人  
—第二次世界大戦期までを中心に—

研究代表者・講師 古川 哲史  
(歴史学／比較文化・社会論)

本研究は日米関係史のなかで、幕末期から第二次世界大戦期までの期間において、日本人とアフリカ系アメリカ人（アメリカ黒人）がどのような関係や交渉をもち相互影響を与えたかを明らかにすることを目的とした。とりわけ日米関係の黎明期である幕末期の事例からいくつか取り上げ考察し、今後の課題を論じた。

アメリカ合衆国では独立戦争さなかの1776年に、トマス・ジェファソン起草による独立宣言が公布され、1789年にはジョージ・ワシントンが初代大統領に就任し、同年、合衆国憲法が制定された。この「建国の父祖」たちがアフリカ系の奴隷を所有していたのは、合衆国史の出発点における理念の歪を象徴していよう。それから2年後の1791年、北米でラッコの毛皮を積み、東アジアで取引しようと日本近海にやってきたアメリカ船があった。レイディ・ワシントン号とグレイス号である。この二隻は嵐を避けるためと取引目的で、同年4月から5月にかけて南紀・串本の桟野浦に11日間停泊した。前者の船には、白人のほか「黒人20人、中国人5人ほど」が乗り組んでいたという。アメリカ建国初期に、何らかの形で日本人とアフリカ系アメリカ人との接触や交流の機会があったのであろうか。資料の探索とともに、さらなる検証が必要である。

幕末期に海難者として米国船に救助されアメリカに渡った中浜万次郎（ジョン万次郎）や浜田彦蔵（ジョゼフ・ヒコ）などのアメリカ体験は知られている。彼らはアメリカでは人種差別にも遭遇した。前者は北部でアメリカの初・中等教育を受け、後者は南部と西部で学び、ともに黎明期の日米関係で活躍した。一方、同じ時期の日米関係で役割を果たしたアフリカ系アメリカ人に、ニューヨーク州ロングアイランドのサウスハンプトン出身ピラス・コンサー（Pyrrhus Concer）がいる。1845年、黒船来航の8年前、捕鯨船マンハッタン号が伊豆諸島近海で日本人遭難者を救助し、江戸湾で幕府側に引き渡した。幕府は乗組員の上陸を許可しなかったが、船上で幕府役人との交流が持たれた。その交歓に白人のマーケイ

タ・クーパー船長とともに役目を果たしたのが、歌の才のあった黒人操舵手コンサーであった。奴隷として生まれたコンサーは、後に郷里の名士ともなる活躍をした。コンサーについてはアフリカ系アメリカ史や日米関係史のなかで、新たな評価が必要だと思われる。

1853年7月、開国を求めてペリー提督率いるアメリカ海軍の軍艦が浦賀沖に来航した。翌年、ペリーは再度来航し、上陸した水兵、海兵隊、楽隊、士官らが整列しているなかを、幕府の高官と通訳に案内されて応接所に向かって進んだ。「提督の両側には背の高い立派な体格の黒人が行進した。この二人は一分のすきもなく武装して、提督の護衛にあたったのである。この日のためにとくに選ばれたこの二人は、艦隊きってのハンサムな黒人だった。もちろん、こういうことはすべて効果をねらったことにすぎなかった」と『ペリー艦隊日本遠征記』はその光景について記している。黒い肌の色を含めた外見が日本人に与える強烈な印象や威圧感などを計算して、アフリカ系アメリカ人にこうした役割が与えられたのであろうか。

1860年2月、新見豊前守正興を正使とする日本初の米国への外交使節「万延元年遣米使節団」が太平洋を渡った。一行が初めて見たアメリカはサンフランシスコであり、そこでは蒸気を利用した機械類、街路のガス灯など数々の文明の利器に驚嘆させられている。その後一行は、パナマまで海路を南下し、汽車でパナマ地峡を横断、待機中の米船でメキシコ湾から大西洋に出て、ニューヨーク沖に到った。そして5月中旬、首都ワシントンに到着し大任を果たした。その後はフィラデルフィア、そしてニューヨークに滞在した。ニューヨークではホイットマンが「ブロードウェイのページェント」と題した詩で著したように、使節の〈サムライ〉たちはブロードウェイを四輪馬車で時代絵巻のように行進し、歓迎を受けている。使節団は6月末に同地を米艦に乗って出港し、アフリカ大陸を周り、インド洋、バタビア、香港などを経て11月10日、品川にたどり着いた。

この間、使節団の団員のうち、かなりの者が日記や回想録を記し、約40篇が現存している。彼らは道中、様々な人種や民族の人々と接しているが、当然のことながら、そのなかにはアフリカ系の人もいた。団員たちが初めて多くのアフリカ系の黒人を目にしたのはパナマ地峡であった。その時の黒人の外見について野々村市之進は、「人物色黒キコト墨ヲ塗りタル如ク、頭髮黒ク縮ミ、丈ケ高く、鼻獅々 [ママ] 二似タリ、唇アツク、卑賤ハ跣足、軍卒ハ米人ニ似タリ」と記している。首都ワシントンのホテルでは目の不自由な黒人ピアニストの演奏会に招かれているが、随員の中にはホテルで働く黒人女性に

差別の実情を訴えられ、不憫に思っ持参の扇子を与える者もいた。使節が訪れたアメリカは奴隷制が廃止される数年前の時期であり、奴隷制廃止の気運にあることを知っていた通詞のひとり名村五八郎は、日記の中で人身売買を極悪だと非難している。

使節団は帰路、米艦ナイアガラ号に乗って喜望峰回りで日本に向かい、ポルトガル領カボベルデ諸島のサン・ビセンテ島とアンゴラの港町ルアンダに寄港する。サン・ビセンテで玉虫左太夫らは、「分ラナイ」、「スケベイ」といった片言の日本語を話す黒人に会っている。小舟でパイナップルを売りにやってきた島民のひとりが、かつて長崎に滞在していたようである。ルアンダでは一行全員が上陸し、鎖につながれて働かされている奴隷たちを見ている。同地は黒人奴隷の積み出し港として知られ、英米の哨戒艇が監視に出動していた。この時期には、すでに奴隷貿易は禁止になっていたからである。しかし、副使の村垣淡路守範正はこの地で600人ほどの奴隷を米国船が仕入れたらしい旨を記している。こうしたアメリカによる奴隷貿易の実態の一部が、米側資料による裏づけは必要であろうが、日本側の資料にも残されることになった。

以上、幕末期のわずかな事例だけを取り上げたが、現在の日米関係の結びつきから見れば、幕末はまさに関係の黎明期である。しかしそうした時期にも、日本人とアフリカ系アメリカ人の係わりの諸相がある。明治維新を経て、日本人は日清・日露戦争を、第一次世界大戦そして第二次世界大戦を経験し、占領期から現在に至る。その間の急速な日米関係の深まりは改めて述べるまでもないだろう。そして両国間の関係史上に、アフリカ系アメリカ人の存在をより頻繁に見ることになるのである。

今後、本研究をさらに進めていくには、よりトランスナショナルな歴史研究、グローバルな共同研究が必要である。

## 個人研究

# 心理療法基礎論の為の基盤造りに向けての基礎研究

研究代表者・准教授 廣瀬 幸市  
(臨床教育学)

本研究は、心理療法を新たな視点から捉え直そうとする心理療法基礎論を構築する為の基礎研究である。本研究を含む全体構想は、将来の心理臨床学の研究方法論にも及ぶような心理療法基礎論を提案することであるのだが、本研究では、そのような全体構想のうち、その端緒的研究に取り組んだ。本研究は、申請者が2005年に学位取得した論文『意識・存在フィールドについての心理臨床学的考察』での研究が下敷きになっており、「場所論的心理療法モデル」として既に提案している視座を基にしながら、心理臨床家が臨床実践を通して得ている知見を新たな認識で捉え直すことができるような視座について研究してきた。

このような視座は、輸入学問としての臨床心理学が無自覚に則っている存在論的基礎を批判的に乗り越えていくことによってしか得られない。そのためには、伝統的なく実体の存在論)を〈関係の存在論)へと解体しなければならず、その上で、更に〈生成の存在論)へと構築し直さなければならない。宇宙や物質世界を始めとして、生命世界、そして人間世界も相互連関的な動的世界であり、複雑系の世界である。このように、世界を生成する世界と見て、自然を自己自身を形成する自然と見る思想は、複雑系科学によって初めて興ったものではなく、能産的自然や自然 (physis) に遡ることのできる生成の思想の系譜であろう。このような思想は西洋に限らず、むしろ東洋一般の生命思想に営々と見られた考え方でもある。とりわけ大乘仏教思想の唯識哲学において、縁起思想としてはっきりと語られている内容である。全体は部分を含み、部分は全体を含み、部分と全体が能動的に相入し、部分は他の部分と相互作用しながら全体を形成しつつ、その全体から影響を受けて変化し、また変化することによって全体に影響を及ぼす。部分と全体とが相互に他を含みながらスパイラル的に変動していくという、事事無礙法界の世界は、しかしながら、複雑系科学という、自然科学の新しいパラダイムとして興ってきた思潮がなければ、神話的意識から遠く離れた現代人にとって

は、理解しようとする気すら起こさないものとなってしまっている。新しいディスコースが求められる所以である。

これまでの臨床心理学では、心理療法論とは各種技法を基に論じた心理療法原論であった。複雑系思想から論じられるような心理療法論は構想すらされていなかった。そこで、このような心理療法論を今後は「心理療法基礎論」と呼んで、将来の心理臨床学構築のための礎としていく必要があると思われる。本研究では、この心理療法基礎論が則るのに相応しい大局的かつ本質的な思想基盤を、人文科学や社会科学に限定せず、自然科学の諸科学に互って探し求めた。その結果、辿り着いたのが複雑系思想であった。学位取得論文においては、自らの心理臨床実践を通して直感的に掴まえていた思考の本質を、それまでに親しんでいた哲学的準拠枠を頼りに手作りに近い形で提示したに過ぎなかったが、本研究を通して、その思考を改めて広いパラダイムから眺めることができた。時系列から見れば、研究当初から複雑系を志向していたのではなかったが、研究を終えた現時点で結果から眺めてみると、正になるべくして成っていったという形成過程になっている。更に、分野横断的に思想を探し求めた結果として、宗教と心理療法との関連および、社会学を始めとする社会科学領域の学問との関連に止まらず、自然科学のパラダイム・シフトと軌を一にしていることを見出したのは、予想以上の収穫であった。

本研究で見出された、「心理療法は、それ自身の弁証法的運動によって、自己自身を無限に生成し続け、『行為的直観』的に進み行く、無限の差異化運動である」という心理療法の本質を記述する為には、臨床心理学のみならず他領域多方面の知見が必要となってくる。しかしながら現時点では、それらを一望の下に見晴らせる視座を、管見では、臨床心理学分野からは提出できていないように思われる。そこで、この視座を提示していくためには、議論の為の共通基盤を整備していく必要に迫られていると考えている。本研究においては、上で述べてきた研究成果と併行して、将来の心理療法基礎論を構築していく上で不可欠である複雑系の知見を盛り込んだ、研究成果報告書『複雑系から見た心理療法理解—心理療法基礎論に向けて—』の編纂・発刊を行った。この研究成果報告書は、全国の臨床心理士養成指定大学院および臨床心理学を設置している大学に寄贈された。心理療法基礎論の構築には今後未だ長い議論が必要になると思われるが、その議論を始める為のお互いの基本的了解事項として、本報告書はこれからの共通基盤となっていくものと考えられる。このような将来構想における一里塚としての位置づけを想定している。

なお、本研究に基づいて、大学の2007年度夏学期に配当された臨床心理学特殊講義において、複雑系から見た心理療法について14回のレクチャーを行った。ここに併せて報告しておきたい。



## 海外学会参加報告

# 「僧伽における仏教徒女性の役割に関する国際大会」 について

西藏文献研究 嘱託研究員 ダシュ ショバラニ

本年(2007年)8月17日から20日まで、ドイツ・ハンブルグのハンブルグ大学にて開催された第一回僧伽における仏教徒女性の役割に関する国際大会：比丘尼律と受戒の系譜(1st International Congress on Buddhist Women's Role in the Saṅgha: Bhikṣuṇī Vinaya and Ordination Lineages)に発表者として招待され、参加した。以下その報告を概説する。

ドイツの仏教学財団(Studienstiftung für Buddhismus <Foundation for Buddhist Studies>)がハンブルグ大学アジアアフリカ研究所(Asia-Africa-Institute of the University of Hamburg)と協力して、当大会を開催した。その内容について記述する前に、テーマとされている問題の背景を簡単に述べたい。現在、Theravādaの国々を初め、チベットにも正式な比丘尼は存在しない。歴史の暗闇の中でTheravādaの比丘尼の系譜が一度絶えた後、その復活は難しくなってきた。女性の場合、比丘僧伽と比丘尼僧伽の両方から具足戒を受けないと正式な比丘尼になれない。故に、現在、Theravādaの国々では、出家を望む女性は沙弥尼の立場にとどまってしまうのが現状である。Sakyadhita(仏教徒女性の国際協会)を初めとするいくつかの組織の努力によって、近頃ほんの数人の女性が台湾や韓国の比丘尼僧伽から具足戒を受けて正式な比丘尼になっている例も見られるようになっているが、殆どの場合、比丘僧伽や在家たちによって認められていない。チベットの場合、仏教が伝わった時代が遅くなっていたため、比丘尼制度が全く成立していない。そこで当国際大会の目的として打ち出されたのは、律や比丘尼問題の研究者とその実践者である男女の出家者たちが共に、チベットに比丘尼制度を成立させるべく、問題点を教義論と実践論から考察し、大会終日にダライ・ラマに提案することであった。

7月16日昼、関西国際空港を出発し、17日午前2時頃にハンブルグに到着した。午前中は大会登録及び説明会などがあつた。午後は発表者たちと主催者たちの交流のため小さな歓迎会が開かれた。

7月18日朝8時から10時まで開会式が行なわれ、10時から夜9時まで学会発表が次の三つのパネルで行なわれた：

1. 比丘尼僧伽の成立<Foundation of the Bhikṣuṇī Order>
2. 比丘尼の得度受戒<Bhikṣuṇī Ordination>
3. 比丘尼僧伽の歴史<History of the Bhikṣuṇī Order>

研究発表者は19カ国から約65人、参加者の数は500人あまりであった。私は、「比丘尼僧伽の歴史」をテーマとした第三パネルで、「Misinterpretations of the Buddhist Texts and the Problem of Ordination of Women」(仏典における誤訳と女人出家の問題)というタイトルで研究発表をした。このパネルの司会者はハンブルグ大学名誉教授 Lambert Schmithausen 博士であつて、他の発表者はバンコクの Fragile Palmleaf の Peter Skilling 博士、タイの Mettanando Bhikkhu、東京国際仏教学大学院大学教授 Florin Deleanu 博士、Texas 州 Austin 大学の Ivette Maria Vargas-O'Brian 博士と Wisconsin-Madison 大学の Damchö Diana Finnegan 比丘尼であつた。

私の研究発表の概要を簡単に記す。仏典において、女性に対する差別を指摘する箇所が少なくない。例としてあげると、釈尊は比丘尼として女性がサンガに入る事を拒否したことがよく批判の対象となる。結局女性はサンガの一員として認められたが、下位の立場を与えられた。八敬法などによって女性が二次的な存在として扱われるようになったとされる。また、五障、変成男子や女性に対する軽蔑的な言葉使いも仏典において見られる。これらの考えをもとにして現在も女性の出家者及び在家者たちは比丘尼になれない、穢れた存在として見られるような厳しい扱いを受けている。当発表では、仏典の誤った解釈がどのようにして女人出家の妨げになっていったかを五障の問題を中心に明らかにした。経典の正しい理解のみが真実を明らかにすることができる。問題は仏典にあるのではなく、翻訳において生じるニュアンスの誤った理解にある。現在、女人出家をめぐる問題は、様々な地域と時代背景から生じる誤解の結果であることをパリー語、サンスクリット語及び漢訳のいくつかの要文の吟味で考察した

7月19日も終日研究発表が続いた。全ての発表が次の六つのパネルで分類された：

1. 律系譜の歴史<History of the Vinaya Lineages>
2. 現代における伝統と要求の両極性-I<Polarity

between Tradition and Requirements-I>

3. 現代における伝統と要求の両極性-II<Polarity between Tradition and Requirements-II>
4. 上座部仏教：スリランカ、ミャンマー、タイ、バン  
グラデシュ<Theravada: Sri Lanka, Myanmar,  
Thailand, Bangladesh, >
5. 大乘仏教：中国、ベトナム、韓国、チベット、タ  
イ<Mahayana: China, Vietnam, Korea, Tibet,  
Thailand>
6. 二重の具足戒と律の教育の復興のための事例  
<Examples for the Revival of the Dual Ordination and  
Vinaya Training>

7月20日は、ダライ・ラマを会長とし、様々な仏教国  
から比丘と比丘尼9人ずつの代表者が集まってチベット  
で比丘尼制度の成立問題について会議を行なった。結論  
として今年の12月にインドのDharamshalaで学会を開催  
し、チベットの比丘僧伽に納得させ、比丘尼制度成立の

許可を得ることがダライ・ラマによって提案された。彼  
はチベットにおける比丘尼制度の成立に賛成したが、  
「自分は独裁者ではなく宗教指導者である」ため彼自身  
の意見よりも比丘僧伽全体の意見に基づき決められるこ  
とが理想的であると述べた。そして、チベットでは根本  
説一切有部律 (Mūla Sarvāstivāda Vinaya) が守られてい  
るので、韓国や台湾で四分律 (Dharmaguptaka Vinaya)  
に基づき比丘尼になったチベットの尼僧たち (この者た  
ちの多くは西洋人であって、チベットの尼僧は一人も存  
在しない) によって安居 (vassa)、布薩 (uposatha)、自  
恣 (pavāraṇā) 一出家者に関してこの三つの基本の行事  
を四分律からチベット語に翻訳し、チベットの尼僧たち  
がそれを行なうことを勧めた。

当大会はチベットにおける比丘尼制度の成立に関して  
画期的な大会であって、新しい歴史を生み出すに相違な  
い。



ハンブルグ大学(ドイツ)にて

## 海外学会参加報告

### 第13回国際真宗学会大会参加報告

国際仏教研究 研究補助員 コンウエイ・マイケル

国際仏教研究班の研究活動の一環として、加来雄之准教授・一楽真准教授を招聘し、木越康研究員・井上尚実研究員・筆者が、研究発表パネルを組んで、2007年8月3日から5日まで、カナダのカルガリー大学で開催された第十三回国際真宗学会大会 (International Association of Shin Buddhist Studies 13th Biennial Conference) に参加した。本大会は、日頃の研究成果を海外に発信し、北米における浄土真宗の研究・開教の状況を把握するために良い機会であった。

今大会の80名の参加者は、北米と日本の真宗研究者・北米の開教使・北米の真宗門徒を中心に、南米・ハワイ・オーストラリアからの代表も含み、国際真宗学会の多様な会員層を反映していた。そのうち38名は、「Neither Monk nor Layperson (僧に非ず、俗に非ず)」という大会テーマに様々な視点から呼応する研究発表を、二日間にわたって行った。初日は、本研究班の囑託研究員としても活躍されているニューヨーク州立大学のマーク・ブラム教授の基調講演 *Religious Values that Define a Tradition: Rennyō's Voice in Premodern, Modern, and Postmodern Shinshū* (伝統を明示する宗教的価値観：前近代・近代・そしてポストモダンの真宗に通底する蓮如の声) で始まり、その後二部会に分かれ、それぞれに、3日に2セッションと4日に3セッション、合計10の各90分セッションが開催された。発表時間は一人およそ20分で、5分の質疑応答の時間もあった。事前に設定されたセッション毎のテーマは必ずしもなかったが、主催者の配慮で、各セッションにおける四つの発表の主題は、ある程度の関係性を持つように構成されていた。

前もって組織されたパネルとしては、以下に詳説する大谷大学パネルの他に、*The Pure Land Experience of Ojo and Honen's Instructions for Death: Ancient Myth or Reality?* (往生という浄土体験と法然の死に関する指示：古い神話か現実か)と題した浄土宗研究所パネルと、*Our Conceptions and Portrayals of Amida in the Contemporary World* (現代社会における我々が考え、表現する阿彌陀像) というテーマのケネス・タナカ教授が中心となったパネル発表も行なわれた。

セッションの合間に30分のコーヒー休憩と90分の昼休みが設けられ、懇親会、バンフ・スプリングズ国立自然公園のツアー等、学術交流を深める場も充実した大会であった。このような場では、長年にわたって国際真宗学会の活動に携わってきた日米の大学教員、*The Institute of Buddhist Studies* とその他の大学に育てられている若き研究者、北米の寺院を現場とする東西両本願寺の開教使、仏法の真実を体得したいと願う聞法者が集まって、浄土真宗について語り合っていた。大谷大学からの参加者は学友と法友に交じって、古い関係の絆を確かめ、新しい関係を築き上げた。真宗関係の博士論文執筆のため、この秋から本学へ留学することが決まっているカナダMcGill大学のジェシカ・メインさんと、この機会に親しく話せたことも有意義であった。

*Transcending Dualism: Neither Monastic nor Secular as a Way through the Troubled World* (二項対立を超越して一混迷する世界を渡る方途としての「非僧非俗」というテーマのもとで、大谷大学のパネルは、3日の午後に行われた。パネルの発表は、「僧に非ず、俗に非ず」という大会テーマについて様々な角度から論じ、全体としては学術的・歴史的観点から親鸞の「非僧非俗」という表現に込められた現代的意義を明らかにしようとした。「非僧非俗」の学術的背景を道禪の思想に見出し、『教行信証』後序の文脈における「非僧非俗」の位置を考察することによって、その表現の普遍的な意義を明らかにし、親鸞が「僧に非ず、俗に非ず」と自称したことの歴史的背景を尋ねることによって、親鸞が取った、二項対立を超える真仏弟子の立場を示し、更に「非僧非俗」という教言は、現代の念仏者の社会的実践の位置づけにどのような指南を与えるのかということを追究することによって、親鸞教学における実践論の可能性をも指摘した。このように、各発表の主題とアプローチは異なっていたが、パネルテーマに沿って相互に響き合う形になった。特に、「非僧非俗」という表現に表される親鸞の同朋精神と、一切衆生が救われていく道としての念仏というテーマは、全ての発表を貫くモチーフであった。発表順序は時代を追う形で、まず道禪の教えのうちに「非僧非俗」の背景と起点を明らかにした上で、親鸞の生涯と著作に

沿って「非僧非俗」の意味を考察し、その表現が我々現代人に語るメッセージを明らかにした。

筆者の発表は、“Throwing Open the Gates of the Pure Land: Daochuo's Recognition of the Latter Days of the Dharma as the Foundation for neither Monastic nor Secular”（浄土門を切り開く—「非僧非俗」の根拠としての道綽の時機観）という題のもとで、道綽の時機観を紹介し、「化身土巻」所引『安樂集』の文を考察した。末法の到来が僧と俗という生活形態を超えた仏道を要請したと論じて、道綽が明かした時機相応の教としての本願念仏が一切衆生に開かれている仏道であるということを論証した。そして、親鸞が「化身土巻」において、道綽の思想を受け止め、この時機相応の仏道を「非僧非俗」という表現で言い表したということを明確にした。

加来雄之准教授は、“Neither Monk nor Layman’ as a Method for Questioning Ourselves as Disciples of the Buddha”（仏弟子を問う方法としての「非僧非俗」）という発表において、「非僧非俗」の意味を「化身土巻」の文脈における位置を問い直すことによって、その表現の現代的意義を明らかにした。まず、親鸞の著作の中に、「非僧非俗」という表現が一箇所にしか使われていないということを指摘し、『教行信証』においてよく使われている「道俗」という概念と「僧俗」という表現を比較することによって、親鸞教学における「僧俗」という表現の特異性を立証した。そして、「非僧非俗」という表現を「後序」の流罪記録の文脈において捉え直すことによって、「僧」が「真仮の門戸を知ら」ない「諸寺の釈門」を指し、「俗」が「邪正の道路を弁」えない「洛都の儒林」を意味するということを論じた。つまり、「僧」は、興福寺・延暦寺に代表される、専修念仏運動に対して政府による弾圧を要請した、律令制度における役人としての官僧を意味し、「俗」は、その弾圧の命令を下した、世俗的権力を握る貴族の知識階層を意味するということを論じた。親鸞が「非僧非俗」と自称したことが、中世社会の宗教的権威と世俗的権力の座を占めた知的集団との訣別を告げることであったと述べた。最後に、「非僧非俗」を「化身土巻」の文脈に位置づけることによって、その表現の普遍的意義を「非仮非偽」というように見出した。

一楽真准教授の発表は、“The Name ‘Foolish Stubble-headed One’”（「愚禿」の名のり）と題して、親鸞が流罪を契機として名のった「愚禿」の意義を明らかにした。流罪という歴史的背景について述べた上で、親鸞が「禿の字をもって姓と」したことの意義について考察した。「禿」という名のりが、親鸞が社会において認められているあらゆる地位を辞退し、人間を職業や生活形態

によって分類することを超えた「非僧非俗」の立場を表白するものであると論じた。その立場の実例として、親鸞が三部経千部読誦を断念したエピソードを挙げ、親鸞が「僧俗」という二項対立の超越だけではなく、人間を如何なるように区分けすることも超越することを目指したということを論じた。その立場の到達点を示す例として、親鸞が専修念仏の運動に弾圧を加えた者に対して晩年の消息において示した態度を紹介した。それらの手紙において、親鸞が加害者と被害者という対立を超えた本願念仏の道をあらゆる衆生が救われていく道として勧め、弾圧を加えた者も本願に出遇うことを願ったという態度が、「善悪」・「利害」・「貧富」、あらゆる二項対立を超越していく念仏生活を物語っていると論じた。『教行信証』「後序」における「已非僧非俗是故以禿字為姓」という文はこの立場を明確に表現していると論じた。

“The Position of the ‘Study of Praxis’ in Shin Buddhist Doctrinal Studies”（真宗教学における「実践学」の位置）という発表において、木越康准教授は、キリスト教の実践神学からヒントを得ながら、真宗教学における実践学の可能性を追求した。「世俗化」と「宗教回帰現象」を対照して、現代の真宗教団が直面している諸問題を紹介することによって、真宗教学における実践学の議論の必要性を明らかにした。そして、親鸞の思想において示される実践に対する態度が、一切衆生に開かれた仏道を根拠づける一方、内向的で社会性を欠いた宗教に進展する危険性を孕んでいるということを指摘した。その危険性は、特に親鸞の思想において、信者の具体的な実践や社会関与を規定するような文言を見出すことが出来ないということに由来すると論じた。真宗教学における正当な実践論を展開する余地を示すために、キリスト教の実践神学の起源とキリスト教「教会」の持つ二義性について考察した。実践神学が伝道の現場の諸問題に対応するために出来上がった学問であるということを指摘し、真宗教団の教化活動が提起する課題において、実践論を展開する可能性を示した。更に、教会の実践において、実践の主体が異なる二つの意義を明らかにすることを通して、真宗学における実践学が、如来の実践によって集められた共同体がどのような意味を持って社会に存在するのかという問いから出発する可能性を提起した。

発表終了後、約20分にわたるパネル全体の質疑応答の時間において、聴衆からの質問とコメントを通して、各発表に対する理解が一層深まった。制限時間を越えてしまったにも関わらず、聴衆と発表者は、各発表に関する活発な議論を交わし、部会が終わってからも、話し合いが続いていた。このパネルで発表された論文は、2008年に

発行される学会誌 *The Pure Land* にまとめて掲載される予定である。この大谷大学パネルの他にも、本学からは真宗学の安富ゼミ大学院生2名と井上研究員が、それぞれ次のような個人発表を行った。竹腰正見「非僧非俗(後序を通して)」、伊藤大信「本願に生きる、ともに生きる」、井上尚実「*The Significance of the 'One-Practice Samadhi' in Early Chinese Pure Land Buddhism.*」(初期中国浄土教における一行三昧の意義)。全体で38の論文発表のうちの7本が大谷大学関係者のものであり、前回の武蔵野大学における大会に続いて、積極的な参加姿勢を印象づけることができた。

現在、国際真宗学会は一つの転換期を迎えていると思われる。この学会を立ち上げ、その発展に寄与してきた稲垣久雄氏(龍谷大学名誉教授)や徳永道雄氏(京都女子大学教授)、アルフレッド・ブルーム博士(ハワイ大学名誉教授)やウンノ・タイテツ博士(スミス大学名誉教授)などの指導者は、高齢や健康上の理由のため今回の大会には参加することが出来なかった。前回2005年の武蔵野大学における大会以来、学会の理事会では世代交代が行われ、より若い世代の学者が指導層となって、これからの学会全体の方向性について模索している。カルガリーでの総会において、会費などに関する学会の規定変更が承認され、ケネス・タナカ会長が学会の展望を述べ、次回2009年の大会は龍谷大学において開催されることが決定した。

学会の帰途、加来准教授・井上研究員と筆者は、カリフォルニア州パークレー市を現地調査のために訪問した。6日の夕方、当研究班の嘱託研究員である羽田信生氏と会合を持ち、カリフォルニア州における真宗の開教活動の現状について報告を受けた。近年、羽田氏は病気を患っていたが治療によって随分と回復し、各地における法話など、米国内の教化活動を再開している。翌7日は、カリフォルニア大学パークレー校の図書館を見学した後、パークレー東本願寺にKen Yamada 開教使を訪ね、寺院の活動についてお話をお聞きした。午後には、Jodo Shinshu Center (浄土真宗センター) という西本願寺の新施設を視察した。The Institute of Buddhist Studies の本校と Buddhist Churches of America の監督部に加えて、龍谷大学の語学学習センターが宿泊施設と共に、カリフォルニア大学に隣接する大規模な建物に集められている。その晩、Maida Center of Buddhism (毎田仏教センター) で、特別学習会が開催され、20人の参加者が集まって羽田氏の講義を聴いた後、加来准教授が参加者からの質問に応じて、親鸞の教えについて語った。真宗門徒の社会関与の教法的根拠など、様々な疑問は、アメリカにおける真宗信者の問題意識と関心を反映していた。

今回の学会参加と現地調査は、北米における浄土真宗の研究・開教の状況と動向を把握するために、とても有意義で貴重な体験であった。



カルガリー大学キャンパスにて

## 研究調査出張報告

# 2007年度 第1回 真宗本廟(東本願寺)造営史に 関わる史料調査並びに聴き取り調査報告

真宗本廟(東本願寺)造営史研究 チーフ・教授 木場 明志  
研究補助員 大谷めぐみ

真宗本廟(東本願寺)造営史研究班は、2007年度に数回の史料調査を計画しており、ここでは第1回調査として、5月3日～4日に富山県南砺市・高岡市において実施した史料調査、および聞き取り調査について、その調査内容と成果の概略を報告する。調査は、とくに短時日に効率よく多面的な成果を挙げることを目指した。

- |      |             |  |
|------|-------------|--|
| 5月3日 | 9:00～17:00  | 富山県南砺市真宗大谷派城端別院善徳寺史料調査                       |
|      | 同時並行        | 城端町真宗大谷派宗林寺史料調査                              |
| 5月4日 | 9:00～12:00  | 前日に継続して善徳寺史料調査                               |
|      | 同時並行        | 福光町在住旧刀利村出身者(南源右衛門)宅訪問。献木史料調査、および献木関係伝承聞き取り。 |
|      | 13:00～15:00 | 刀利地区献木関係実地調査、および実地聞き取り。                      |
|      | 16:00～18:00 | 高岡市伏木、真宗大谷派法輪寺(旧伏木木揚場)史料調査                   |

5月3日の真宗大谷派城端別院善徳寺史料調査は、寛政度本山再建への富山県南西部、ならびに五箇山地域の助力を示す文献史料の調査、および史料の写真撮影を行った。遡る2006年8月、南砺市教育委員会の委嘱に基づいて大谷大学調査団(代表加藤基樹現助教)が、善徳寺所蔵の法宝物・什器類(約3000点)の悉皆調査を行った際、寛政度本山再建助力に関する本山・徳川幕府からの拝領遺品を発見しており、今般はそれを裏づける文献史料の収集を目的とした。拝領遺品の一つは東本願寺達如上人染筆の名号軸であり、その箱蓋裏墨書から、天明8年の本山焼失による寛政年間の再建において、本山が幕府から飛騨白川村の木材4000余本を再建用材として寄進を受けた時、木材の伐り出しから庄川を利用した伏木港までの運搬について、人夫賃・食糧負担を善徳寺が核となって南砺一円の村々に寄進を募って賄ったことへの褒

賞として、下付されたものであることが知られた。また、用材運搬時に「幕府寄附の本願寺用材」であることの標識となる、幕府拝領の旗印が入れられていた木箱も併せて発見された。そこで、今回の調査では、富山県教育委員会編『城端別院善徳寺史料目録』によって上記に関連すると思われる文献史料を抜き出し、閲覧調査による確認作業を経て、必要史料の撮影を行った。撮影史料点数は100余点におよび、作業は翌日午前中までを要した。

同日、同時並行で調査人員を割いて行ったのが同町内の真宗大谷派宗林寺史料調査である。これは、チベット仏教研究者の寺本婉雅に関する資料調査であり、先述の善徳寺悉皆調査の際に寺本旧蔵品の一部が含まれていたことに端を発する。寺本は滋賀県竜王町の出身であるが、宗林寺から跡継ぎ養子を迎えており、そのために宗林寺に遺品が所蔵されるとする情報を踏まえ、今回、本格的に調査を行った。寺本は東本願寺の明治度再建が成った明治28年に真宗大学に入学し、中退してチベット仏教研究を目指して中国に渡り、チベット語・モンゴル語を習得した後、3度に亘ってチベットに入って仏教研究を行った。寺本の行動は研究に止まらず、チベット仏教の指導者ダライ・ラマを日本に招聘するなど、仏教による友好提携に基づく東アジア仏教の興隆に尽しており、本山両堂再建直後の学事・教学不振の回復、振興に寄与した人物であった。本山の明治度再建には多大の経費を要したことから、清沢満之が経済面で海外布教縮小を訴え、教学振興を優先課題とすべしとした時期のことである。東本願寺は清沢の主張を容れ、学事振興を理由に、中国と周辺諸地域に仏教学校の設立を進めるとともに、積極的に海外仏教研究に取り組む方針へと切り替えたのであった。当時の真宗大谷派機関誌は、寺本によるダライ・ラマの新造東本願寺への参拝を報じ、仏教興隆とアジアの広域的仏教連帯の象徴的な出来事として扱った。寺本に関する直接資料は少ないとされ、事績は知人が戦後にまとめた『葦蒙旅日記』に頼るしかなかった。その意味で、大谷大学博物館所蔵の寺本将来品も、あくまで「伝・寺本将来品」だったのである。今回の宗林寺調査では、寺本が中国甘肅省のチベット仏教タール寺に滞在した5年間の資料を中心に、貝葉経典をはじめとする年

紀入り自筆資料など40余点が確認された。また、そのうちの完本でない貝葉経典の一つは、大谷大学博物館所蔵の伝寺本将来品と併せると完本になることも確認され、年紀のある資料類が宗林寺に遺され、年紀を持たない資料の一部が大谷大学に寄贈されたと思われる経緯も判明した。なおその後、寺本研究を課題とする本学研究者によって行われた滋賀県の生家に近い親戚宅において、多数の事跡を示す資料や自筆日記の一部の発見があり、河口慧海の陰に隠れていた入蔵僧寺本婉雅の全貌が急速に解明されつつある。本廟造営史研究だけでなく、チベット研究・近代仏教研究にとっても大きな進展が期待できる発見となった。宗林寺ではたまたま帰省中の木村学長(仏教学)にも調査現場を視察戴き、ともどもに資料の発見を喜ぶことができたことも望外であった。

5月4日は、午前中は善徳寺史料撮影を続ける傍ら、もう一班を形成して、南砺市福光地域における明治度造営に関わる本山献木史料の調査、および献木の地元である刀利地区出身者への聞き取りを行った。刀利地区は、戦後に刀利ダム建設によって水没した地域である。その地の神社境内の大樫が、明治度本山再建のために明治15年に寄進され、現に東本願寺御影堂内陣後門脇北側の丸柱として使われているのである。その大樫の運搬は困難を極め、小矢部川の川筋を利用しようにも急峻で狭い川幅に阻まれて叶わず、ついに左岸沿いの標高差200メートルもあろうかという尾根まで、近隣の門徒衆が集まって一丸となって綱で曳き上げ、尾根筋を2キロほど下流方向へ曳いた後、川幅の広がったところで川筋に曳き落とし、伏木港の集積場(木揚場)に出したというのである。刀利出身の南源右衛門氏宅にはその際の記録帳が残され、運搬する人びとをサポートした、村々からの米・味噌・醤油類の寄付、炊き出しなどの様子がよく知られる貴重な史料である。用材寄付の記録は多いが、それが門徒の人びとのだのような尽力によって運ばれるのかを示す史料は、これまで皆無であった。女性や子どもにおよぶ、地域ぐるみの支援体制が明らかになってきたのである。ここには加藤享子氏という地方史研究者がおり、南家史料の調査、および南氏をはじめとする刀利地区出身者への丁寧な聞き取りにより、雪上に用材を運ぶ冬場の仕事からくる身体の冷えを暖めた南家について、囲炉裏が3箇所もあった間取り図が復元された。また、用材運搬の綱の掛け方なども復元して描かれ、木曳き音頭も採録された(『富山民俗』掲載)。今回は、加藤氏の案内により、改めて南氏宅その他を訪ねて、記録の閲覧・撮影と聞き取り調査を行った。

午後は、作業を終えた善徳寺調査人員も合流し、刀利地区の今はダムで水没している現地付近の踏査、および

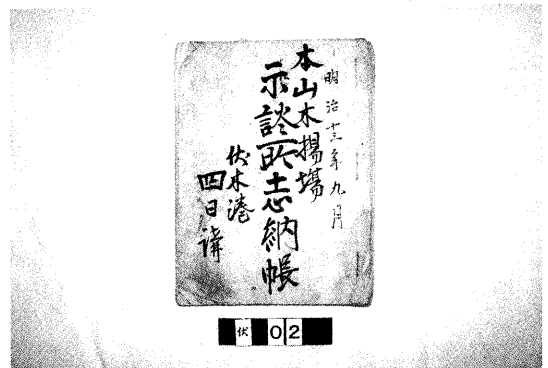
用材運搬路の実地確認を行った。加藤・南氏ほかの旧刀利地区住民の案内を得て、絶好の好天に恵まれたなか、絶景(当時は険阻な山間)を歩いて当時に思いを馳せ、現地写真を撮影した。



刀利地区献木現地調査風景

午後4時ころからは今回の最終調査地、高岡市伏木真宗大谷派法輪寺での史料調査・史料撮影を行った。伏木には伏木港があり、富山県内から献木された本山再建用材を貯木し、東本願寺へ向けて発漕した木揚場が開かれていた。明治度再建時の伏木木揚場には木揚場説教所が併設され、それが後に発展して現在の真宗大谷派法輪寺となったのである。法輪寺には木揚場時代の帳簿類がよく残り、この地を通過した個々の用材が記録されている。木揚場の遺構としては新潟木揚場があつて、明治期の建築をそのままに遺して貴重であるが、木揚場記録を蔵する例はあまりなく、その意味できわめて重要な史料を調査・撮影することができた。法輪寺は富山湾に流れ込む小矢部川河口に位置するので、調査終了後に周辺の伏木港を歩いて往時を偲んだ。港の見学をするうちに辺りは夕闇に包まれ、急ぎ京都への帰路についた。

なお、第2回史料調査は8月9日~10日、東京大学史料編纂所、国立公文書館内閣文庫、東京都立中央図書館木子文庫において、真宗本廟造営史料の調査と収集を目的に実施している。



伏木木揚場『示談所志納帳』(法輪寺蔵)

## 特別研究員研究発表会

### 中国仏教研究方法の創新と運用

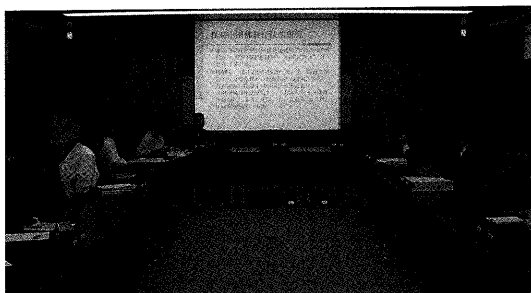
元特別研究員 聖 凱

特別研究員の聖凱氏は在任の研究期間が2007年4月20日～7月20日と大変短かった上に、研究を終了されて慌しく帰国された事もあって、本研究成果報告を作成することがなかった為、主事が氏に代わって研究成果報告をするものである。

聖凱氏は、「地論学派と涅槃学派についての研究」という研究課題を携えて、木村宣彰教授（学長）に指導を仰いだ。研究内容に関しては、門外漢からはその詳細は窺い知れないが、南北朝における仏教学派である地論学派と涅槃学派の歴史と思想研究について、日本における学界の研究状況の把握に努められたようである。併せて、関係資料の収集を精力的に行われた。

氏は短い滞在期間の中で、6月14日に「中国仏教研究方法の創新と運用」と題して、マルチメディア演習室にて研究発表を行われた。南北朝仏教学派研究において、言語文献学、歴史考証学、思想史、哲学的解釈学を活用

するという、新方法としての「総合的研究方法」を提唱された。メディア機器を駆使されて、研究資料のデータベースをリアルタイムで閲覧しながら、氏の今後の研究の方向性を示された。質疑応答の時間には、指導教授も奨励されるスケールの大きな研究であることが解説された。なお、発表は通訳を介して出席者に広く伝えられた。



発表中の聖凱氏（於：マルチメディア演習室）

### 真宗総合研究所彙報 2007.5.1～2007.9.30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

- ◇5月1日(火) 12時10分～（博綜館5階第4会議室）
  1. 2007（平成19）年度「指定研究」の研究計画の一部変更について
  2. 2007（平成19）年度「指定研究」の研究計画の一部変更について
  3. その他

○「一般研究」研究代表者事務説明会

- ◇5月9日(水) 17時50分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）
  1. 研究遂行上の準備と事務手続きについて
  2. 研究活動に関する予算執行について
  3. その他

○「指定研究」チーフ・キャップ・庶務連絡会

- ◇5月31日(木) 12時10分～（真宗総合研究所ミーティングルーム）

1. 2007（平成19）年度「指定研究」の研究体制について
2. その他

○特別研究員研究発表会

- ◇6月14日(木) 16時10分～（響流館3階マルチメディア演習室）
  1. 発表者：聖凱（真宗総合研究所特別研究員）
  2. 発表題目：「中国仏教研究方法の創新と運用」

■大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

- ◇6月21日(木) 13：00～15：00



(響流館 会議室)

## 第7回公開研究会

本多弘之氏(親鸞仏教センター所長)

「この時代に「本願」を聞くということ

—何を考えるべきか—

◇7月27日(金) 17:00~19:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

## 第8回公開研究会

草野顕之氏(大谷大学教授)

「越後七不思議」

なお、上記研究会の他、文献目録の作成作業を日常業務として継続的に行っている。

## ■大学史研究

## 【研究会】

《近世学事・学寮史研究会》

◇5月7日(月) 16:10~19:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

◇5月21日(月) 16:10~19:00(同上)

◇6月4日(月) 16:10~19:00(同上)

◇6月18日(月) 16:10~19:00(同上)

◇7月2日(月) 16:10~19:00(同上)

◇7月16日(月) 16:10~19:00(同上)

## 【会議】

《作業連絡会議》

◇5月21日(月) 16:10~19:00

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

◇6月18日(月) 16:10~19:00(同上)

◇7月16日(月) 16:10~19:00(同上)

《『注釈 臘扇記』編集会議》

◇5月1日(火) 第48回

(真宗総合研究所オープンスペース)

◇5月11日(金) 第49回(同上)

◇5月16日(金) 第50回(同上)

◇5月23日(水) 第51回(同上)

◇6月1日(金) 第52回(同上)

◇6月13日(水) 第53回(同上)

◇6月27日(水) 第54回(同上)

◇7月6日(金) 第55回(同上)

◇7月11日(水) 第56回(同上)

◇7月25日(水) 第57回(法蔵館)

◇7月31日(火) 第58回

(真宗総合研究所オープンスペース)

◇8月1日(水) 第59回(同上)

◇8月23日(水) 第60回(同上)

◇8月28日(火) 第61回(同上)

◇9月3日(月) 第62回(同上)

◇9月5日(水) 第63回(同上)

◇9月19日(水) 第64回(同上)

## 【調査等】

《他研究機関における大学史研究・

大学史史料室に関する研究会》

◇5月30日

全国大学史資料協議会西日本部会

2007年度総会並びに第一回研究会(於・関西大学)

(参加者:大畑博嗣&lt;研究補助員&gt;、

小野賢明&lt;研究補助員&gt;)

◇7月20日~21日

全国大学史資料協議会西日本部会

2007年度第二回研究会(於・福岡 西南学院大学)

(参加者:大畑博嗣&lt;研究補助員&gt;、

小野賢明&lt;研究補助員&gt;)

《学寮草創期関係寺院調査》

◇7月21日

福岡県太宰府市観世音寺調査

(参加者:大畑博嗣&lt;研究補助員&gt;、

小野賢明&lt;研究補助員&gt;)

大学史研究では、上記の活動の他、近世学寮研究に関する「観世音寺史料」、『講師寮日記』の翻刻を開始した。また、前年度から継続している佐々木月樵研究のための資料調査収集、近世学寮年表の作成研究と大学史資料原本ならびに写真資料の再調査・長期保管作業、所蔵紙焼き資料の整理、東本願寺教団現代史の調査研究などの研究課題に関する調査・整理作業、史料の閲覧・貸出や質問への対応等を日常業務として行った。

## 国際仏教研究

&lt;英語班&gt;

①2007年4月11日(水)

於 真宗総合研究所オープンスペース

2007年8月にカナダ・カルガリー大学で開催される第13回国際真宗学会、大谷大学パネルについての打ち合わせ。「非僧非俗」という学会の全体テーマについて議論し、本学パネルテーマを、“Transcending Dualism: Neither Monastic nor Secular as a Way through the Troubled World”として決定した。

②4月18日(水) 於 真宗総合研究所オープンスペース

第13回国際真宗学会の各発表要旨を検討。要旨と題目の英訳を確認。

- ③ 5月25日(金) 18:00~ 於 博綜館研究室511  
「仏教とナラティブ」研究会を開催。Narrative (物語)に関する文献が紹介され、仏教の経典を研究する上でのナラティブの意義について議論した。
- ④ 5月30日(水) 12:10~  
於 真宗総合研究所オープンスペース  
第13回国際真宗学会のパネルに関する会議を開いた。各発表の読み合わせ、翻訳作業における問題を検討。
- ⑤ 6月14日(木) 16:10~ 於 響流館 会議室  
Mark Blum氏による講演会を、「*An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings*」の編集と翻訳について」というテーマのもとで開催。さらに *An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings* の校正・編集作業の諸問題を検討した。
- ⑥ 6月26日(火) 19:30~  
於 真宗総合研究所フリースペース  
第13回国際真宗学会のパネルの打ち合わせ。
- ⑦ 6月28日(木) 18:00~ 於 博綜館 5F 研究室511  
第二回「仏教とナラティブ」研究会を開催。研究会のテキスト“Nirvāa, Time, and Narrative” (Steven Collins著)の読み合わせを開始。
- ⑧ 7月18日(水) 18:00~  
於 真宗総合研究所フリースペース  
国際真宗学会のパネルに関する最終打ち合わせ。
- ⑨ 7月23日(月) 18:00~ 於 博綜館 5F 研究室511  
第三回「仏教とナラティブ」研究会を開催した。
- ⑩ 8月3日(金)~5日(日)  
カナダ・カルガリー市のカルガリー大学にて開催された第13回国際真宗学会に、大谷大学パネルとして参加。
- ⑪ 9月10日(月)~15日(土) 於 響流館 4F 客員研究室 3  
Mark Blum氏を招き、*An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings* の校正・編集作業を行った。

<ドイツ・フランス班>

- ① 2007年8月1日(水) 13:00~  
於 真宗総合研究所ミーティングルーム  
フランス国立高等研究院とのシンポジウム「宗教と近代合理的精神——日仏文化の比較をとおして」(2006年11月30日、12月1日開催済)の出版について検討した。2008年度に本シンポジウムの発表およびモデレータのコメント原稿を収録した報告集を日本語で刊行する予定で調整中である。

<中国班>

- ① 大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料 (通称: 田代文庫所蔵) の目録作成  
中国華北関連の綴資料 (仮番号19~25) の目録作成作業を継続中。引き続き、残された資料 (中国華中・華南・台湾、朝鮮半島関係) に順次着手する。
- ② 公開研究会の開催  
2007年7月24日(火) 16:00~19:00  
於 真宗総合研究所ミーティングルーム  
・ 満洲引揚げ日本人布教者たちの六十年前の声  
木場明志 (大谷大学教授)  
・ 『吉林省志』に記述される  
満洲国治下の仏教について  
桂華淳祥 (研究員)  
・ 満洲国における東本願寺の開教活動の足跡  
——書簡にみる開教地情報の伝達——  
大谷大学真宗総合研究所国際仏教研究班  
山本 琢 研究補助員  
・ 20世紀前半期、  
東本願寺の中国華北地域における活動について  
——昭和17年までの布教所設置地区の確認——  
大谷大学大学院文学研究科博士後期課程 福島 重
- ③ 中国東北師範大学との共同研究  
「中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進  
2007年8月25日(土)~8月31日(金)、桂華・松川の研究員2名は中国の東部モンゴル地域 (内モンゴル自治区シリングル盟正藍旗・多倫縣、赤峰市翁牛特旗、遼寧省阜新蒙古族自治縣、朝陽市、河北省承德市) 及び北京市において、モンゴル仏教・華北仏教についての調査を実施した。

西藏文献研究班

《海外出張》

- ◇ 2007年7月16日~7月27日  
囑託研究員・DASH Shobha Raniをドイツに派遣。ハンブルグ大学にて7月17日から20日にかけて開催された1st International Congress on Buddhist Women's Role in the Sangha: Bhikshuni Vinaya and Ordination Lineages (第1回僧伽における仏教徒女性の地位に関する国際会議: 比丘尼律と受戒の系譜) に参加、「Misinterpretations of the Buddhist Texts and the Problem of Ordination of Women (仏典の誤解と女性の受戒についての問題)」と題する研究発表をおこなった。学会終了後、オリッサ州立博物館所蔵貝葉写本研究の一環として、ハイデルベルグ大学南アジア研究所 (South Asia Institute, University of Heidelberg) を訪問

し、同研究所でおこなわれている「オリッサ・プロジェクト (Orissa Project)」に従事する研究者との交流をはかり、とりわけ同プロジェクトがカタログ化に取り組んでいる貝葉写本に関する情報を収集した。

◇2007年8月7日～9月10日

嘱託研究員・DASH Shobha Raniとソウル中央大学のHUH Dongsung氏をインドに派遣。インド東部・オリッサ州の州都ブバネシュアルにある州立博物館所蔵の40,000本あまりの貝葉写本に対する研究調査をおこなった。

◇8月29日～9月5日

研究員・小谷信千代をインドに派遣。インド東部・オリッサ州の州都ブバネシュアルにある州立博物館所蔵の40,000本あまりの貝葉写本に対する研究調査と、将来の研究協力体制の構築、すなわち、提携に向けた話し合いをおこなった。

#### 《調査》

◇8月8日～8月10日

研究員・三宅伸一郎、嘱託研究員・清水洋平、研究補助員・松下俊英、同・太田路子の4名は、富山県南砺市城端宗林寺所蔵の寺本婉雅旧蔵書のうちチベット語文献34点、パリ語文献1点、直筆資料6点の整理・調査をおこない、保存措置をおこなった。

#### 真宗本廟（東本願寺）造営史研究

真宗本廟（東本願寺）造営史の全体像把握のための史料調査・史料翻刻・国内調査等、その成果と進捗状況について報告。また、公開研究会を実施すると共に、研究報告会を開催し、史料調査から明らかになった点や問題点を共有化して、今後の課題を整理。

#### 《事務連絡会議》

◇5月18日(金) 17:00～18:30

- 議題：①富山城端別院・法輪寺等調査報告  
②研究報告会  
題目：献木データベースの内容と活用方法  
報告者：大谷めぐみ（研究補助員）  
③その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇6月1日(金) 17:00～18:30

- 議題：①東京方面合同調査について  
②その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇6月15日(金) 17:00～18:30

- 議題：①研究報告会  
題目：東本願寺財務部所管両堂再建史料の

#### 性格

報告者：工藤克洋（研究補助員）

②その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇7月20日(金) 18:00～19:30

議題：①研究報告

題目：『三河大谷派記録』の基礎考察

報告者：安藤 弥（嘱託研究員）

②その他（東京方面合同調査計画案など）

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇9月19日(水) 16:10～17:40

議題：①東京合同史料調査報告

②『真宗本廟（東本願寺）造営史』（仮称）の目次について

③その他（アルバイトの今後の作業方針）

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

#### 《全体会議》

第3回公開研究会（第4回全体会議）

◇2007年5月15日(火) 16:10～17:40

議題：①講演会

題目：本山建築の造営と意匠研究の方法論

講師：永井規男（嘱託研究員）

②意見交換会

場所：響流館マルチメディア演習室

第4回公開研究会（第5回全体会議）

◇2007年7月17日(火) 16:10～17:40

議題：①講演会

題目：仏教再興と明治度造営

講師：木場明志氏（チーフ）

②意見交換会

場所：響流館マルチメディア演習室

〈アルバイト意見交換会〉

◇2007年5月15日(火) 17:50～18:50

議題：①今年度の作業方針について

②その他

場所：響流館マルチメディア演習室

#### 《調査》

◇2007年5月2日(水)～4日(金)

富山城端別院善徳寺、真宗大谷派宗林寺、真宗大谷派法輪寺、旧刀利村献木跡地・献木伝承者宅の史料調査および聞き取り踏査

参加者：木場明志（チーフ）、大谷めぐみ（研究補助員）、鈴木善幸（アルバイト）、遠藤智子（同）、

三宅伸一郎（特別招聘）、加藤基樹（同）、  
大畑博嗣（同）

◇2007年7月13日(金)

東本願寺所蔵『御堂日記』の調査

参加者：平野寿則（研究員）、安藤 弥（嘱託研究員）、  
大谷めぐみ（研究補助員）、工藤克洋（同）

◇2007年7月23日(月)

東本願寺所蔵史料の調査

参加者：木場明志（チーフ）、平野寿則（研究員）、  
江上琢成（嘱託研究員）、川端泰幸（同）、  
大谷めぐみ（研究補助員）、工藤克洋（同）

◇2007年8月9日(木)・10日(金)

東京都立中央図書館蔵木子文庫、東京大学史料編纂所、  
国立公文書館の各館所蔵史料の調査

参加者：木場明志（チーフ）、平野寿則（研究員）、  
伊藤延男（嘱託研究員）、安藤 弥（同）、  
川端泰幸（同）、大谷めぐみ（研究補助員）、  
工藤克洋（同）、他

研 究 所 報 第 51 号

2007年10月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435